慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	青銅器時代のメソポタミアにおける宮殿の平面構成と機能
Sub Title	Mesopotamian palaces of the Bronze age : their layout and functions
Author	高田, 学(Takata, Gaku)
Publisher	三田史学会
Publication year	2001
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.70, No.2 (2001. 2) ,p.87(235)- 137(285)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	論文
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-20010200-0087

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

青銅器時代のメソポタミアにおける宮殿の平面構成と機能

高田　学

一　はじめに

人類の過去の活動や行為を示す物的証拠となる考古学資料の中でも、遺構は遺物と同じく、人類がある目的を持って製作したものではあるが、土地とは切り離せない形で存在する、言わば不動産的な資料である。このことから遺構に関する議論は常に、出土地で活動していた過去の人間集団固有の文化と密接に関わってきた。メソポタミアから出土した遺構に関する諸研究も例外ではなく、むしろこうした傾向が顕著な地域だとさえ言える。メソポタミア考古学では、遺構から得られる属性をもとに設定された型式を、ドイツおよび同国で教育を受けた建築史学者が中心となって、複雑に推移してきた民族的集団の交替と関連づける作業が続けられてきた。この作業により、メソポタミアの古代建築が、後世の建築に様々な面で影響を与え、現代へと続く西洋建築の源泉としての役割を果たしたとの理解がなされるに至った。[1] しかしその一方でこれらの建築遺構が、使用されていた当時のメソポタミア社会の中でいかなる働きをしていたか、という歴史研究上の問題に関しては、未だ充分に明らかにされていない。その理由の一つには、共伴して出土する文字資料の解読に多大な労力を要することも挙げられようが、建築遺構を考古学資料として取り上げ、歴史研究に利用できる形に整備する作業が不完全になされている点も指摘できる。こうした状況は、発掘調査担当者たちの関心と、発掘調査が伴わざるを得ない古代西アジア建築研究の資料的制約を反映している。

古美術品の蒐集や、聖書もしくは古代の著述家の記述

と諸遺跡との関係の確認を目的とすることが多かった、第二次世界大戦前のメソポタミアでの発掘調査においては、遺跡の中でも視覚的に際立ったテルを形成する神殿や宮殿[2]といった、いわゆる公共建築物とされる遺構が集中的に発掘され、今日に至るまで古代メソポタミア建築研究の主たる資料となってきた。またそれらの資料においては、基礎部に石材が用いられることがあるにせよ、主たる建材は一貫して日乾煉瓦であった。よって一度発掘した遺構を良好な状態で保存した上で後から詳細に観察することは困難であり、発掘調査に携わらなかった第三者にとっては調査記録しか研究の対象となり得ない。また遺構の残存高はその多くが大人の平均的身長に及ばない[3]。こうした経緯を受け、研究の中核をなした建築史学者たちは、建築技術や立面意匠ではなく、主にこれら公共建築物の平面に関する属性を分析した上で型式分類ならびに編年を行い、西洋建築の系譜の中にそれらの遺構を位置づけることを最終的な目的としてきた。よって現段階では、建築遺構がその当時どのような役割を果たしていたかという、建築本来の機能を古代メソポタミア史、ひいては古代西アジア史の中で位置づけていくにあたって必要となる遺跡間・遺構間の比較検討が、適切な方法で行われてきたとは言い難い。遺跡間・遺構間比較を可能にする属性を用いながら建築資料の内容を整備し、以上述べたような歴史研究上の問題を明らかにするために適切な分析を行うこと、さらにその結果を文献史料の示す成果と対比させていくことは、建築遺構をより総合的な古代メソポタミア史の復元の資料とするのに重要であると考える。本稿はこのような観点から、古代メソポタミア建築研究において重要な分析対象となってきた青銅器時代の宮殿遺構の平面構成を特に取り上げ、各遺構の歴史的意味の変化について検討を試みようとするものである。また同時に、宮殿遺構という具体的な資料を用いながらも、建築遺構を用いた考古学的分析が、古代西アジア史研究へ今後どのように寄与し得るかという問題についても論じたい。

二　青銅器時代のメソポタミア宮殿に関する研究史

（1）古代メソポタミア建築研究史

まず古代メソポタミア建築研究史、特に宮殿遺構の研究史をたどり、今日に至るまでいかなる研究上の蓄積がなされてきたかを概観する。前述のように、古代メソポ

タミアから出土した遺構に関する従来の研究においては、平面を中心に記録された発掘調査報告のみを分析対象とするものが中心的な位置を占めてきた。こうした中で遺構の構造技術や細部意匠を網羅的に紹介した小林文次の研究[4]はこの分野における研究の中では稀有な存在である。小林は新石器時代から新アッシリア時代までを対象に、住宅、神殿および宮殿という異なる機能を持つとされる各遺構を総合的に取り上げ、アーチなどの構造技術や、壁面や床の細部意匠を紹介している。しかし小林の議論の中心はあくまでも遺構全体や室の形状などを属性にした平面型式の分類にあり、平面以外の記述は資料の紹介を目指したもので、提示した建築意匠を古代メソポタミア史の中に位置づける意図を見いだすことはできない。平面以外の属性に着目したという点で小林の研究に近いダメルジの論文[5]は、扉ないしは通路周りに着目した上で分類を行い、その時期的変化を明らかにした意欲作であるが、こうした立面や建築意匠に関する一連の作業は、ダメルジが予め示しておいた平面型式の時期的変化に関する考察を補強する役割しか果たしていない。

これに対し平面を用いた古代メソポタミア建築研究が、数多く提示されてきたとは必ずしも言えない。この分野の研究を最初に切り開いたのは、二〇世紀初頭にバビロンの発掘を指揮したドイツの建築史学者コルデヴァイだった。彼は出土した神殿や宮殿などとされるカルデア（新バビロニア）時代遺構群を対象に、遺構全体の外形を属性として型式分類を行ったが[6]、このように機能が異なる遺構をまとめて分析対象とした型式学的研究は、長い間進展することはなかった。このことは、第二次世界大戦前の発掘調査で得られた情報を主たる資料とせざるを得なかった、研究上の制約を鮮明に反映している。各調査から平面に関する情報が得られてきたとは言え、発掘調査報告書に記載された内容には調査ごとにかなりの隔たりがあったものと考える。そうした状況の中で、遺構全体や室の形態など、一九世紀以来各遺跡の報告書においてほぼ均質の基礎報告がなされていた属性に注目し、その地域的および時間的差異を明示するのは容易な作業ではない。またカルデア時代のバビロンほど、都市全体が詳細に調査され、様々な機能を有する遺構に関する精緻な調査報告が得られた遺跡は他に見られない。コルデヴァイ以後最近に至るまで、先に挙げた小林とダメルジの論文以外に住宅、神殿そして宮殿など、異なる機能を持つとされる建築遺構をまとめて取り扱った網羅的研究

が見られなかったのは、こうした理由による。

一方で、特定の機能を有するとされる遺構の平面型式設定を目指した研究は、神殿を対象としたものを中心にいくつか示されている。それは、第一に上述のように古美術品の蒐集などを目的とすることが多かった、第二次世界大戦前のメソポタミアでの発掘調査において、遺跡の中でも視覚的に際立ったテルを形成する神殿などの、いわゆる公共建築物とされる遺構が集中的に発掘され、比較的資料数に恵まれてきたからである。またもう一つの理由は、ウルク古拙文書以降の文字資料によって、神殿が原文字時代以降、特に初期王朝時代のメソポタミアにおいて社会組織や経済の中心として機能していたことが示されたことと関連している。古代建築研究者たちが、この地域で見られる各民族的集団の複雑な推移を神殿遺構の平面型式の変化が反映していると考えてきたのである。

神殿遺構の平面型式研究に初めて取り組んだのはコルデヴァイであるが、その研究対象はカルデア時代のバビロンに限られており、コルサバードやニネヴェの宮殿遺構など、数は少ないながらも当時既に発掘されていたその他のメソポタミア鉄器時代遺構などとの比較は行われていない。上述のように、機能が異なるとされる遺構をまとめて扱った稀有な研究でありながら、建築の系譜を探る建築史学的考察には至らなかったと言える。青銅器時代までに限定されてはいたものの、神殿遺構の平面が遺跡間・遺構間比較の対象となったのは、コルデヴァイの後、ウルクの発掘を始めたドイツ隊の指揮を執ったレンツェンによる研究が最初である。

レンツェンの論考は、コルデヴァイが採用した遺構全体の外形を属性とする方法を基本的に踏襲しながら、室の形状など他の属性も加えた上でメソポタミアを南北に分割し、それぞれで異なる平面型式の展開を指摘することに注力している。[7] しかしより注目すべきは、神殿の中央空間が屋根のない中庭だったのか、屋根つきの広間だったのかということを初めて問題にした点である。中央空間に屋根があったかどうかは従来、遺構を構成する各室間の機能分化の度合いの差異を表す指標と捉えられてきた。屋根がない空間には形状や大きさの面で梁を渡すための制限がなく、屋根がある場合より、多くの室を周囲に配することが可能となる。このことから先行研究においては、屋根がない空間を動線上の一点として諸室間の連絡を保てることで、各室の機能上の独立に対する

要求を満たすと考えられた。[8] 遺構の全体や一部の形状を属性とした型式分類に関心の中心を置き続けてきた古代メソポタミア建築研究において、室と室との連絡という過去の人間の活動をめぐる問題に直接関わったの唯一の例である、中央空間に関する諸属性を用いた型式分類研究は、神殿のみならず宮殿や住宅などその他の多くの遺構を対象にしながら議論されてきた。本稿の目的である遺構の役割変化という考古学上の問題を明らかにするためには、こうした研究の内容を有効に活用する方法を考え出すべきである。

ただここで留意すべきは、メソポタミアから出土した遺構の一部に、屋根がない部分があったかどうかについて判断するのは、先に示した同地域の遺構の出土状況からすれば極めて難しい、ということである。先学がメソポタミア建築遺構の持つ、こうした資料的制約を認識していなかったとは考えられないが、分析対象とした各遺構に中庭があったか否かについての証明が充分でなかったことは、これまでの古代メソポタミア建築研究の顕著な特徴である。さらに先行研究では、室間の連絡に注意が払われつつも中央空間に関する分析の結果が、あくまでも民族的集団の変遷と関連づけられるに留まっているのも注意すべき傾向である。つまりレンツェン論文はそれらの遺構が使用されていた当時、各遺構が持つ社会的な役割にどのような差異があり、古代のメソポタミア社会にどのように位置づけられるかという、比較研究によって明らかにされるべき考古学上の問題と、古代メソポタミア建築研究とが乖離する嚆矢ともなったのである。

レンツェン論文を受け、新石器時代および青銅器時代のメソポタミア神殿遺構平面研究に関する二つの論考が日本人によって相次いで発表された。まず小林は『建築の誕生』の中で、前に述べたように神殿のみならず住宅や宮殿とされる遺構も取り扱いつつも、神殿遺構の平面型式の変遷に関する論考を考察の中核に据えている。レンツェン同様、遺構全体の外形や室の形状、そして中庭の有無などを属性とする分類方法を採用しながら、独自の型式設定を行った。[9] また中庭に関する議論においても、その有無を判断するための基準案を提示している。[10] 次いで、堀内清治の『古代メソポタミア神殿の成立』では、型式設定において若干独自の見解が示されてはいるものの、その目的や対象資料は基本的にレンツェン論文を踏襲したものであった。[11] 神殿遺構の平面に関して、極めて内容が近似している両者の主張の違いで最も顕著なのは

中庭に関する議論である。例えばウルク・エアンナの神殿D中央のT字形空間を小林が中庭と称しているのに対し、堀内は屋根の有無の判断を避けて「中央空間」と呼んだ。小林が独自の判断基準を示したにも関わらず、小林論文を受けて提出された堀内論文においてこの基準が言わば無視されたことは、あくまでも基礎部しか残されていない遺構から得られた情報のみによって推測せざるを得ない、中庭に関する研究の難しさを示している。

こうした問題点を抱えながらも、古代メソポタミア神殿遺構研究は、ダメルジとハインリヒによって集大成への道を歩むこととなった。両者の著作では、コルデヴァイ以後余り取り上げられることのなかったカルデア時代のバビロンも含め、新石器時代から鉄器時代までの神殿遺構が網羅されており、これが同じく平面型式研究に取り組んだ他の先行研究と大きく異なる点である。ダメルジは上述のように、自らの目的とする立面や細部意匠の時期的変化の考察を平面型式の変遷と関連づけるために、従来から行われていた遺構全体もしくは室の形状を属性とした平面型式研究を行っており、当初から神殿遺構平面型式研究を集大成させることを意図していたハインリヒと研究の出発点こそ異なっているが、結果として共に長大な平面型式論を完成させている。

しかし両者の平面型式論を見ると、その分類法において相違が見られることが分かる。ハインリヒの論文はレンツェン論文発表以降、新たに発掘調査が行われた神殿遺構を資料に加えながらも、コルデヴァイ以来の伝統的手法を継承し、遺構全体や室の形状および中庭の有無を基準としつつ型式分類を行っており、若干の差異はあるにせよドイツ人研究者たちによるそれまでの研究成果と大差ない内容を提供している。[12] 一方、ダメルジ論文はレンツェンらの分類に加え、新たに「室群」の概念を導入した。これは遺構を室の部分的集合の複合体として捉え、これを室群内に観られる動線により分類するという、斬新な内容を持つものであった。[13] ただ、遺構を室群に分割する基準が明確でない上に、室群の型式分類の結果は、従来の遺構全体や室の形状および中庭の有無による分類の結果とのみ関連づけられており、研究の目的自体はそれまでのドイツ建築史学者によるそれから大きく逸脱するものではなかった。ゆえにダメルジが遺構を人間の活動の変化を探るための考古学資料として明確に意識していたとは必ずしも言えないが、ハインリヒ論文がコルデヴァイ以降のメソポタミア神殿遺構平面研究の一応の完

成と見るならば、ダメルジの研究はドイツ学派の伝統に立ち、神殿のみならずメソポタミアから出土した多くの古代建築を対象としながら、方法論的に新しい試みを開始したものと位置づけられることは間違いない。

以上の研究史の流れから、これまでの古代メソポタミア建築研究が示してきた関心の対象が明らかとなる。つまり、

① 神殿遺構

② 遺構全体と中央空間およびその周囲の部屋の形状

③ 中央空間が屋根のある広間だったか、屋根のない中庭であったか

の三項目である。先行研究においては神殿遺構全体や空間の形状、および中央空間に屋根があったか否かを属性としながら型式分類が行われ、遺跡間・遺構間比較を経た上で、各型式が古代メソポタミアにおける民族的集団の目まぐるしい交替と関連づけられてきた。もちろん、こうした文化史的再構成の作業がこれまでの古代メソポタミア史の分野で大きな功績を果たしてきたことは否めない。しかしこれまでの議論において考古学上の問題、つまり建築遺構がその当時どのような役割を果たしていたかという、建築本来の機能を古代メソポタミア史の中で位置づけていくにあたって必要となる遺跡間・遺構間の比較検討が行われてきたとは言い難いのである。この状況は、これまでこの領域での研究の中心的役割を担ってきたドイツ学派の目的意識と深く関わっていると考える。建築史学の基本的な目標は、世界各地域の建築の伝統が時代ごとにいかなるものであったかを論究することにあり、ドイツは絶えずこの分野の中心であり続けてきた。その型式論的考察は建築を造り、改築した人々の活動を復元するには有効であるものの、建築を利用した人々の活動、つまり建築の社会的機能という、歴史学的な問題を探るにあたっては不十分と言わざるを得ない。ただ、先に述べたように中庭の有無など先行研究の一部で取り上げられてきた、建築内での人間活動に直接関わる属性に対する分析の手法は、建築史学、考古学といった立場はどうあれ、今後の建築遺構研究に重要な示唆を与えることになろう。とりわけ考古学資料として建築遺構を取り上げる場合は、そうした属性の研究の成果と、これまでの発掘調査記録を有効に活用しながら、遺構の役割を遺跡間・遺構間比較を経た上で明らかにできるような方法を適用していく必要がある。このことは、これまでの研究の特徴が神殿遺構研究のそれと近似している

宮殿遺構研究においても同様に指摘できることは論を待たない。

（2）宮殿遺構研究史

神殿遺構が古代メソポタミア建築研究の中心的資料となったのと対照的に、これまで集中的に調査されてきた宮殿遺構について、それらを集成し、建築史学や考古学それぞれの立場から遺跡間・遺構間での平面の差異に言及した論考は、最近に至るまで極めて少なかった。しかしコルデヴァイによって研究が始められた点においては、神殿遺構研究と変わりはなく、研究の歴史自体は決して浅くない。それにも関わらず宮殿遺構が古代、とりわけ青銅器時代のメソポタミア建築研究の中でも神殿遺構ほどには取り上げられならなかったのは、これまでの古代メソポタミア史研究者が宮殿に対して示してきた関心の低さと、刊行されてきた宮殿遺構の発掘調査報告の量に大きく関連している。

前節で述べたようにコルデヴァイの研究対象は、カルデア時代のバビロンの諸遺構に限定されており、[14] 宮殿についても同時代、つまりナボポラッサルやネブカドネザル二世によって造営されたもののみに触れられているに過ぎない。ただ遺構の外形という特定の属性を用いた型式分類に着目しているのは、今世紀初頭においてはコルデヴァイらドイツ隊による発掘調査報告書のみであり、これは当時既にコルサバードやニネヴェの宮殿遺構を発掘していながらも古美術品の蒐集の域を出ていなかった英国やフランスによるそれとは好対照をなす。こうして他国よりもいち早く平面の形態に注目することで、ドイツ学派の建築史学者は、宮殿遺構に関する研究においても今日に至るまで指導的立場を確保することとなった。しかしドイツにおいても、メソポタミア宮殿遺構に関する議論が神殿遺構に関するほど活発に行われてきたとは言えない。

ウルク古拙文書以降の文字資料によって原文字時代以降、特に初期王朝時代のメソポタミアにおいて、神殿が社会組織や経済の中心として機能していたことが示された一方、宮殿であることが確認されている遺構は、現在のところメソポタミアにおいては初期王朝時代に至るまで報告されていない。このことは、神官に代表される宗教的権威と、王に代表される世俗的権威との分離を表す具体的な記録が、初期王朝時代第Ⅲ期より前の文献史料から確認できないとされていることと無関係とは言えず、[15]

現状ではメソポタミアにおける宮殿の出現が、新石器時代からも見られるとされてきた神殿に比べ遅かった可能性が高いと言わざるを得ない。こうした事情が、現代西洋建築の起源を古代メソポタミア建築に求め、その平面変化の系譜を辿ることを最終的な目的としてきた建築史学者が、宮殿遺構の平面を資料として軽視してきた背景となったものと考える。

またメソポタミア諸遺跡での発掘調査がこれまで、平面型式の遺構間比較に充分な量の宮殿遺構をもたらすものではなかったことも、宮殿遺構を対象とした平面研究が活発に行われてこなかった理由として挙げられる。全てもしくは大部分のメソポタミアの古代遺跡に宮殿が存在していたとは考えにくく、また神殿より遅れて現れた資料である可能性が高いため、実際に存在していた宮殿は、神殿ほどには多くはなかったであろう。(16)

さらに出土状況や調査内容に左右される資料間の質的な差の問題も、宮殿遺構研究にとっては深刻である。日乾煉瓦を主たる建材とする古代メソポタミア建築は、埋没後数千年の間に風や雨といった自然の営力、またテルの形成要因ともなる遺構上での建設活動や戦乱という、人為的な作用を受けながらその姿を変化させてきた。従って遺構が使用されていた当時の平面を完全に保って出土することは珍しく、各遺構の保存状況はまちまちである。加えて宮殿遺構全てが完全発掘によって確認されているとは限らず、部分発掘に留まっている場合もある。遺構に限らず、考古学資料を比較研究に用いる場合、取り扱い可能な資料数が少ないと、それだけ資料一つ一つの出土状況の違いが分析に大きな影響を与えることになる。こうした状況下においては、宮殿遺構を平面型式分類の対象として遺跡間・遺構間比較を行うには無理が生じるのも当然で、ドイツ学派が宮殿遺構を型式研究の主たる資料として位置づけなかったこと、また同学派以外の研究者が最近に至るまで宮殿遺構を美術史的観点から論じる傾向が強かったことは、むしろ自然な経過と言えよう。実際、コルデヴァイ以降一九八〇年代に至るまで、古代、特に青銅器時代のメソポタミアの宮殿遺構を集成した上で分析を加えた論考は極めて少ない。以上のような研究状況を省みると、宮殿遺構を宮廷活動復元のための考古学資料として扱うためには、これまでに得られた資料に関する情報を最大限に活かせるように新たな観点から分析し、歴史資料に資する形へ整備することが不可欠であることが分かる。本稿で行う宮殿遺構の平面分析

の方法は、特にこの点を考慮したものである。

宮殿遺構を集大成し、分析ならびに考察を加えた研究こそ少ないものの、各遺構に関する調査報告は、コルサバードの発掘調査報告がボッタらによって一八四九年に発表されて[17]以降、断続的に刊行されてきた。宮殿遺構を伴う各遺跡の調査状況を概観すると、発掘調査を最も盛んに実施していたのは、古代メソポタミア建築研究の指導的役割を果たしてきたドイツではなく、英国であることがわかる。にも関わらず、ドイツ学派が古代メソポタミア建築研究を常に主導してきたことは、英国の古代メソポタミア研究全体において、建築遺構研究の占める位置がさほど重要ではなかったことを間接的に示している。コルデヴァイが一九一一年にカルデア時代のバビロンの宮殿遺構の平面を分類した後、メソポタミアから出土した宮殿遺構を集大成し、それらの平面などに対して分析を加えた研究が再び現れたのは、前節で述べたドイツ学派に属する小林の論文が発表された一九五九年であった。小林は、ボッタらによるコルサバード初の調査報告書から一九五五年にプロイサーが著したアッシュール出土諸宮殿の報告書[18]に至るまで、各宮殿遺構の調査結果から得られる情報を取り上げながら、古代メソポタミア宮殿遺構の平面計画の諸特徴とその変化について言及している。特に注目しているのは

① 玉座の間およびその周辺の室での配置

② ヌジとマリの発掘調査報告書における室の部分的集合

に関する記載である。まず①について彼は、玉座の間とされる空間が宮殿遺構にほぼ共通して見られるとした上で、それが王の「私的生活圏」と「公的生活圏」の中間に置かれており、特に北部メソポタミアにおいては古アッシリア時代以降、直列に配置された二つの中庭の間に配されるようになると指摘した。宮殿遺構を機能別室集合の複合体として捉えることになった小林の研究は、遺構全体もしくは室の形状をもとにした平面型式研究が主流で、かつ宮殿遺構に対する関心が薄かった当時のドイツ学派においては異端と呼ぶべきものであった。これは、利用できる資料の数が限られている宮殿遺構研究において、神殿遺構と同様に平面型式を扱うことが困難であることを小林が認識していたことを示しており、ドイツ学派内部から、間接的ではあるが自らの研究の限界を明らかにしたものとして注目される。しかし、小林論文における玉座の間の定義は従来ドイツ学派が注目してき

た室の形状などに強く依存しており、[19]ヌジやマリの宮殿ように、玉座をはじめとする共伴資料が出土している遺構に関する記述を除けば、曖昧なものに終始している。従って玉座の間の位置と大きく関わってくる室の部分的集合の定義についても問題を残す結果となっているが、それにも関わらず室の部分的集合の存在をあえて指摘した背景には、②で挙げたように、豊富に出土した共伴資料をもとに宮殿遺構を機能別室集合の複合体として捉えたヌジやマリの発掘調査報告書の記載に、小林が少なからず関心を寄せていたことが挙げられる。

ヌジで確認された、サマッラ期以降に属する一二の文化層のうち、特に注目されるのは約四千枚もの粘土板文書が出土した前二千年紀中頃のアラプハ王国時代に比定されるⅡ層である。Ⅱ層に属し、かつテル中央部から出土した遺構は、一九二七年から一九二九年にかけて調査された。発掘された部分だけでも約一万m^2という、テル表面の約二五％の広さを有していたこと、遺構出土文書に官僚組織の事務や支配者の妃に関する記載などが頻繁に見られることなどから、[20]アラプハ王国の為政者の住宅、ならびに行政経済活動の中心的役割を果たした宮殿と考えられてきた。

ヌジを発掘した米国隊は、それまでメソポタミア宮殿遺構の発掘調査を率先して担当していた英国、また常に古代メソポタミア建築研究において主導的立場にあり、主に神殿遺構を資料として平面型式研究を盛んに行っていたドイツのどちらにも属さない方法よって遺構を記録した。スタールら調査担当者は従来通り、出土した基礎部に基づいて平面に関する情報を記録した上で、開口部（出入口）、また場合によっては扉の軸受け装置の場所などから、移動が比較的容易な空間どうしを一まとめにした、いわゆる室の部分集合をいくつか導き出した。その上で出土した粘土板文書などの文字資料や土器などの遺物に加え、埋設してあった下水処理施設などの出土地点を精査し、遺構を構成する各部分の機能について「公的謁見関係の部分」「王個人の居住部分」[21]「高官の住宅」などのように推定したのである（第一図）。

こうした発掘調査および遺構機能の解釈の方法は、ヌジの発掘調査が終了してから三年後の一九三四年にパロー率いるフランス隊が開始した、マリの発掘調査の方法に少なからず影響を与えている。マリは、粘土板文書や碑文の形で大量に出土した文字資料によって、初期王朝時代から古バビロニア時代にバビロン第一王朝のハン

第一図　ヌジ・宮殿の機能別室集合
(STARR 1939 に一部加筆)

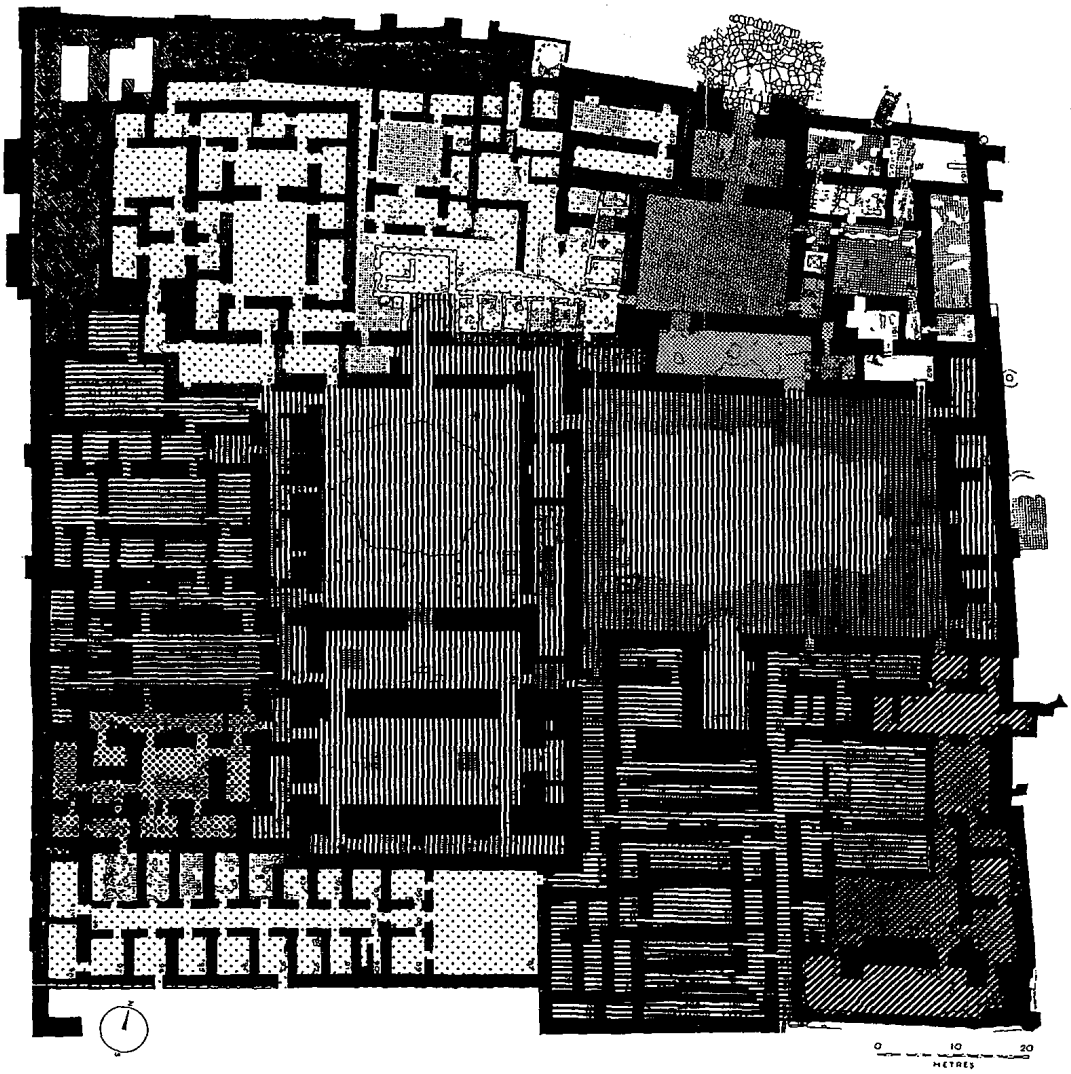
	機能別室集合	凡　例	主な出土資料	出　　典
公的空間	公的行事に関連する部分		玉　座	STARR 1939 pp.125-158
	行政経済活動に関連する部分		経済文書	STARR 1939 pp.159-174 MARGUERON 1982 pp.445-448
	神　殿		イシュタル神像	STARR 1939 pp.137-153
私的空間	居　所		為政者の妃の私的書簡 浴　室 トイレ	STARR 1939 pp.143-148
	サービスに関連する部分		井　戸 竈	STARR 1939 pp.159-174
	不　明			

ムラビによって破壊されるまで、常に古代西アジアの政治経済にとって重要な都市であり続けたことが既に明らかにされている。そのうち一九三五年から一九三八年にかけて調査された、前一八世紀頃の王ジムリリムの宮殿遺構について、パローはヌジでのスタールらと同じ方法で「王の住宅部分」「官僚によって行政経済活動が行われた部分」「サービス部分」[22]などいくつかの機能別室集合に分割し、同遺構が王の住宅のみならず、国家の公的活動、つまり外交や典礼、行政経済活動の中心としても機能していたことを明らかにした（第二図）[23]。

ヌジやマリで考古学者の手により行われたこうした作業は、宮殿遺構における人間活動を復元する手法の一つとして極めて重要である。メソポタミアの全てもしくは大部分の宮殿遺構の平面構成に対してこの方法を適用できれば、遺跡間・遺構間の比較研究によって、いかなる働きをしていた部分の平面計画がどのように変化しているかについての具体的な情報を得ることができる。従来、建築学においては、平面をはじめとする建築の構成は使用者の組織や制度、経済的水準などを一定度反映するとされてきた[24]。こうした見地に立てば、発掘調査報告で得られる宮殿遺構の平面に関する情報と、文献史学の分野で部分的に明らかにされてきた宮殿をめぐる諸活動に関する成果とを対比させることで、宮廷活動の変容を詳細に把握することが可能となる。しかし両遺跡以外において、詳細な宮廷活動の内容を示す文献が大量に、それも出土地点が厳密に記録された上で収集されている宮殿遺構は見られず、それらから得られた碑文などの文字資料は、遺構が宮殿として利用されていたことを証明する以上の役割を果たしていない。ヌジの発掘調査が終了し、最終報告書が刊行された後においても、マリ以外の宮殿遺構の発掘調査報告書で、引き続き平面に関する情報の提供に重点が置かれているのは、共伴遺物の出土状況が平面構成の詳細な分析を妨げるものであることを示していると言えよう。

『建築の誕生』の中で小林が、こうしたヌジやマリの宮殿遺構の調査成果について重大な関心を持ち、細かく紹介したこと、また「玉座の間」を軸とした機能別部屋集合の存在を推測したことについて、同じドイツ学派の研究者が知らなかったとは考えにくい。しかし神殿遺構の全体もしくは室の形状を主たる研究材料としてきたドイツ学派の建築史学者の多くは結果としてこれを半ば「無視」することになった。特にドイツ本国の研究者は

第二図　マリ・ジムリリム宮殿の機能別室集合
(PARROT 1958a に一部加筆)



	機能別室集合	凡　例	主な出土資料	出　　典
公的空間	公的行事に関連する部分		外交文書	PARROT 1958a p.120など
	行政経済活動に関連する部分		契約書　会計書	BOYER 1957, 22など
	神　殿		奉納物　祭壇	PARROT 1958a pp.16-22
私的空間	居　所		私的書簡 王の財産管理文書 トイレ	BOTTÈRO 1956, 244など
	サービスに関連する部分		食料調達に関する文書 竈	BIROT 1960, 32など
	その他			
	不　明			

コルデヴァイ以来の問題意識を保持し続け、今日に至るまでスタールやパローらが行った報告を紹介することはあっても、自らが歴史研究としての目的を持ち、独自の方法で詳細な平面構成分析を行うことはなかった。ドイツ学派において宮殿遺構を取り上げ、小林に次いで新たな問題意識のもとで議論を行ったのは、室の部分別集合を独自の基準で取り上げたイラクの研究者ダメルジであった。前節で述べたようにダメルジは、遺構の平面を「室群」の概念を用いて分類した。[25] これは遺構を室の部分的集合、いわゆる室群の複合体として捉えるという、斬新な着想を持つものであった。ただ遺構の室群への分割が、扉の軸受け装置や扉（開口部）の位置に拠っていた、ヌジやマリの発掘調査報告書で示された手法を援用することなく、また独自の基準を提案することもなく行われ、論文の基礎となる部分が半ば恣意的な方法によって構築されていると言わざるを得ない。一方で、遺構を神殿、宮殿また住宅といった機能別に分類せず、全ての遺構をまとめて分析することで、神殿遺構に比べて資料数が少ない宮殿遺構から得られる平面に関する情報を利用しようと試みた点では評価できるが、室群分類の結果は、従来神殿遺構を対象に議論されてきた遺構全体や室の形状および中庭の有無による分類の結果とのみ関連づけられており、研究の目的自体はそれまでのドイツ建築史学者によるそれから大きく逸脱しないまま、宮殿遺構などを新たに資料として加えたに留まっている。

建築史学者のグループであるドイツ学派による、このような型式論的考察は、建築を造り、改築した人々の活動を復元するには有効であるものの、建築を利用した人々の活動、つまり建築の社会的機能という、歴史学的な問題を探るにあたっては不十分と言わざるを得ない。一九五九年に小林によって部分的に取り上げられた機能別部屋集合に関する問題を、その後のドイツ学派が結果として否定的に扱ったこと、そして一九七二年にダメルジが提案した部屋集合が「機能別」に設定されたものではなく、宮廷活動の変容を解決するにあたって重要な役割を果たすものではなかったことで、米国とフランスの考古学者によって第二次世界大戦前に提案されたヌジやマリにおける平面構成の詳細な分析法が、メソポタミア宮殿遺構研究において宙に浮いた状態に置かれたと言える。その後一九七八年に刊行されたハレシのマリのジムリリム宮殿に関する論考は、こうした研究目的の分化に拍車をかけた。ハレシは、遺構に共伴する遺物の考古学

的型式、出土地点また数量に関する分析が、遺構が持っていた機能を確かめるにあたって必要な作業となる、との認識に立った上で、ジムリリム宮殿の持つ重要性を指摘している。[26] その理由としてハレシは、遺構のどの部分がどのように使用されていたかを知る上で不可欠な原位置出土遺物の量が、宮殿を含め他の古代西アジア建築と比較すると極めて多いこと、またそうした出土遺物の中でも大きな割合を占める文字資料が、遺構の各部分の働きを示唆するのに充分な質と量を備えていることを挙げている。この指摘は、マリの宮殿遺構から得られた情報が、考古学的に他の遺構よりも豊富かつ優れていることを示しただけではなく、様々な機能を併せ持っていたと考えられる古代メソポタミア宮殿に対し、その平面構成に関して考古学的分析を加えることが、古代メソポタミア史に大きく貢献するという認識の表れとも言える。しかし一方でハレシ論文は、あくまでもマリのジムリリム宮殿一遺構のみを分析対象としたものであって、宮殿で行われていた活動の変容を探るのに必要な遺跡間・遺構間比較の視点を欠いている。また同論文の最終目的はジムリリム宮殿の中でも「内庭ブロック（Inner Court Block）」と呼んでいる玉座の間周辺部分の平面構成に注目しながら、その部分の壁面装飾や神像などを復元することにあったため、ハレシが強調していた、宮殿遺構を歴史学資料として分析することの意義を自身の研究に充分活かさないまま、議論を進めることになったのである。ただし、宮殿遺構を歴史研究に積極的に活用していこうとするハレシの研究が、平面型式研究に固執するドイツ学派のそれとは着目点や方法の面で大きく異なっていたことで、同学派とそれ以外の研究者間に存在する問題意識の差異がより顕在化する契機となったことは確かである。このように古代メソポタミア宮殿遺構、特に青銅器時代宮殿を対象とした研究の内容が二つに分化する傾向は、一九八〇年代に入りそれぞれのグループから示された大著によって、より明確なものとなる。

（3）最近の宮殿遺構研究

ヌジやマリの発掘調査報告書で見られた詳細な平面構成の分析は、それぞれの報告書が刊行されて以降、古代メソポタミア史に関するさまざまな概説書で取り上げられてきた。[27] その一方でスタールやパローが採用した手法を援用し、各宮殿遺構の機能の変化を古代メソポタミア史の中で位置づけていく試みを行った研究は極めて少な

く、一九八〇年代に至るまで、青銅器時代遺構に関して本格的に取り組んだ研究はハレシ論文以外に見られなかった。ハレシに続き、ヌジやマリでの調査成果を踏まえた論考が発表されたのは、マルグロンによる論文が刊行された一九八二年であった。[28] この年は、ドイツ学派の指導的役割を果たしていたハインリヒによって、神殿遺構に関する平面形式研究の集大成が発表されたこともあり、古代メソポタミア建築研究の一つの転換点となった。

マルグロンは、ヌジやマリの発掘調査報告書で試みられた平面構成に関する細かな分析を、その他のメソポタミア青銅器時代宮殿遺構にも適用し、各宮殿における人間の動きがいかなるものであったかを解明しようとした。彼はまず、分析対象とした全ての遺構の平面を部屋の部分集合に分割し、各部分の機能について推定した。そしてその結果をもとに、宮殿において機能別部分がいかに配置されていたかを指摘した上で、部分間の連絡状況を導き出し、各宮殿遺構の平面構成上の特徴の違いを明らかにしようと試みている。スタールやパローによる遺構分析法を評価し、それに依拠して論を進めようとする姿勢は、ハレシのそれと基本的に変わらない。しかしハレシ論文とマルグロン論文の大きな違いは、分析対象資料の数にある。前者ではマリ・ジムリリム宮殿の、それも玉座の間周辺部分のみを主な対象としているのに対し、後者の分析対象はメソポタミアで出土した宮殿とされる青銅器時代遺構全てに及んでいる。[29] マルグロンは、これらの遺構をヌジやマリの宮殿遺構と同様、異なる機能別室集合の複合体として理解し、複合体の中でそれら室集合がその他の室集合といかなる関係を保っていたかを指摘した。これまで複数の宮殿遺構を扱った研究が、形態的特徴に基づく室集合分類に主眼を置いてきたドイツ学派の論考に限定されていた中で、マルグロンの研究は同じく複数の宮殿遺構を扱いながらも、宮殿で活動していた人間の動きがいかに変化したか、という考古学的な問題に取り組んだ初めての試みであった。ヌジやマリの宮殿遺構の発掘調査報告書から得られる情報が他遺跡のそれと質量両面で著しい対照をなす状況において、複数の宮殿遺構を分析対象に、過去の人間活動に関わる考古学上の問題を解決していくにあたっては、なるべく多くの宮殿遺構に対して適用可能な方法に則って分析できるよう、まず適切な資料整備を加える必要がある。マルグロンは複数の宮殿遺構を取り扱う際に生じる資料的制約を明確に認識し、青銅器時代の宮殿遺構を、考古学的な比

較研究に耐え得る資料に整備した初めての考古学者として位置づけられる。換言すれば、それまで歴史研究の対象とされることのなかった古代メソポタミア建築、さらには建築史学的考察の対象としても重視されてこなかった宮殿遺構が、歴史学ないしは考古学上の問題を解決するにあたって貴重な資料となり得ることが、マルグロンの大著によって初めて示されたのである。

ただ先にも述べたように、詳細な宮廷活動の内容を示す文献が大量に、それも出土地点が厳密に記録された上で収集されている宮殿遺構を、ヌジとマリ以外の遺跡において見ることはできない。従って開口部や扉の軸受け装置に関する記録から各部屋集合が推定できたとしても、それら室集合の機能を推定するのは極めて困難である。貯蔵用の土器が倉庫であることを、調理用の竈がやサービスに関連する部分であることをそれぞれ示唆する可能性が高いように、文字資料が出土しなくとも部屋集合に対し蓋然性の高い機能推定を行うことは可能であるが、出土場所の機能を特定するのに有効な遺物の記録についてもヌジおよびマリ以上に詳しい宮殿遺構の発掘調査報告書は見られない。こうした制約を解消するために、マルグロンはマリのジムリリム宮殿で推定された各機能別室集合について、その形状や室どうしのつながり方を大きく三型式に分類し、文字資料が豊富に得られなかった宮殿遺構で設定した各室集合がどの型式に該当するのかを論じた上で、それぞれの機能を推定するという方法を採用している。[30] ヌジやマリの宮殿遺構で実施された詳細な平面構成分析の成果をもとに、遺跡間・遺構間比較を通じて青銅器時代のメソポタミア宮殿建築における人間活動の復元を目的とした研究を行うには、こうした資料整備は不可避の手続きであり、マルグロンの研究姿勢は基本的には理解できる。しかし、ヌジとマリ両宮殿遺構とそれ以外の宮殿遺構とで、異なる方法によって各室集合の機能推定法が採用されていることは看過できない問題である。室集合の形状および室どうしのつながり方から行う機能推定は、ヌジやマリで行われた文字資料の内容から行う室集合の機能推定の結果に依存しており、文字資料に拠った機能推定に比べ正確さに欠ける。ヌジとマリの宮殿遺構から得られた平面構成に関する情報は、建築遺構を考古学資料として扱うために必要となる資料整備法を考える上で重要な示唆を与えていることは間違いないが、統一した分析法を採用するにあたって両遺跡は、宮殿遺構を有する数ある遺跡の中の二つに過ぎない

ことを理解しておくべきである。その一方で、本稿が目的とする青銅器時代におけるメソポタミア宮殿での活動の変容へのアプローチを図るためには、両遺跡の発掘調査報告書およびマルグロン論文の成果を何らかの形で援用する必要があることも確かである。古代メソポタミア建築研究の方向を考古学的視点から見通す上で、質の異なる発掘調査報告書をいかに統一的手法で取り扱うかは、今後解決すべき重要な問題になると考えられる。

マルグロン論文発表と同年に、ドイツ学派による神殿遺構研究の集大成とも言える論文[31]を刊行したハインリヒは、二年後の一九八四年に『古代メソポタミアにおける宮殿』を著した。この論文は神殿に関する彼の論考と対をなすもので、コルデヴァイ以来のドイツ学派の伝統的手法を継承し、カルデア時代までの宮殿遺構を網羅した上で、遺構全体や室の形状および中庭の有無に注目しながら遺構平面の変化を論じている[32]。特に注目しているのは中央空間周辺の室の配置状況の変化で、二つの中庭の間に「玉座の間」とされる長方形の室を置く設計が古アッシリア時代に現れ、新アッシリア時代まで存続するものの、次のカルデア時代に至って放棄され、一つの中庭の一辺に隣接する形で玉座の間が設けられるようになると指摘している。こうした平面の展開に関する考察は、一九七〇年代までに発表された、宮殿遺構に関する調査報告から得られる情報を整理した上で提示されている点で評価できるものの、一九五九年に小林によってなされた指摘と大差ない内容を提供しており、そこに新たな知見を見いだすことは難しい。さらには古アッシリア時代以降「玉座の間」が王の「私的生活圏」と「公的生活圏」との中間にあるのではないか、というドイツ学派における小林の先駆的仮説についてはダメルジ同様、関心を示していない。マリのジムリリム宮殿の部屋の一部について、その機能を推定しようと試みてはいるものの、記述のほとんどはパローによる発掘調査報告書の記載の紹介に留まっており、大きな関心を示しているとは言い難い。

こうして近年の古代、特に青銅器時代のメソポタミア宮殿遺構研究を概観すると、ドイツ学派の研究者がコルデヴァイ以来、建築史学者としての目的意識と方法論を固守し続けていることが理解できよう。換言すれば、パローやマルグロンといった考古学者による、遺構の考古学的分析・考察に対するドイツ学派の関心が極めて低いとも言える。第二次世界大戦後のドイツ学派を主導して

きたハインリヒが、マルグロンの研究成果に対して全く関心を示していないことは、偶然による所産とは考えにくい。同じ資料を用いながらも、そこで営まれた活動の内容ではなく、あくまでも建設者の造形意識の復元に力を注ぐドイツ学派と、遺構を機能別室集合の複合体として捉え、それら室集合がその他の室集合といかなる関係を持ちながら、宮廷活動が成立していたのかに注目する考古学研究者との研究目的上の「棲分け」が一九八〇年代に決定的な状況に至ったと考えるべきである。[33] こうした現状にあって、宮殿遺構を歴史研究の資料として用いる立場からすれば、ドイツ学派が採用してきた方法をそのまま援用し、青銅器時代における宮廷活動の変容を把握するのは難しい。しかし、同学派のこれまでの研究は、比較を必要とする本稿の目的へのアプローチを試みる上で避けて通ることはできない。とりわけ、中庭の有無のように、人間の動きに密接につながり、かつ比較可能な属性を選択するにあたって、ドイツ学派による先行研究は極めて有益な情報を提供している。一方スタール、パローそしてマルグロンが行った詳細な平面構成分析は、機能別部屋集合の複合体として宮殿遺構を捉えるもので、宮殿遺構における過去の人間活動の一端を把握する上で充分援用可能な性質を備えてはいるものの、先に述べたように共伴遺物によって各部屋集合の機能が一定度推定できる遺構以外に適用できないという欠点を持つ。従って平面から得られる情報を、遺構の持っていた機能と関連づけながら資料間の比較によりある歴史像を導き出すためには、ドイツ学派とそれ以外の研究者たち双方の研究の長所を引き出しながら、新たな分析法を提示する必要があると考える。

（4）宮殿建築研究と行政経済体制史

ヌジやマリから出土した文献史料によって、両遺跡の宮殿遺構が王やその家族の住宅としてだけではなく、国家の公的活動、つまり外交使節の謁見や儀式、また官僚組織などによる行政経済活動の場としても機能していたことが明らかにされていることについては、既に述べた。両遺跡から出土した、粘土板文書を中心とする文献史料が、少なくとも宮殿遺構内から得られたものについては出土地点が正確に記録された結果、宮殿遺構のどの部分でいかなる活動が行われたかという、他の遺跡からは入手できない知見を発掘調査報告書を通じて得ることができた。しかし両遺跡を含め、メソポタミア諸遺跡におい

ては出土地点が明確でないものの、宮廷活動に関して様々な知見をもたらす文字資料が大量に確認されている。ヌジ文書やマリ文書とともに、これまでの古代メソポタミア文献史学研究を支えてきたこれらの文字資料の多くは、王やその家族、また官僚などが発信者および受信者となった書簡および行政経済文書であり、青銅器時代から鉄器時代を通じ、古代メソポタミア宮殿が王室の生活のためだけに用いられたのではないことが理解できる。これらの文字資料は王やその家族によって直接記されたものも存在するが、遅くともアッカド時代までには、書記などの官僚たちによって組織的に記録されるようになることが明確にされている。[34] このことと、官僚たちによって記された行政経済文書がアッカド時代に著しく増加すること、またアッカド時代の同地域において初めて領域国家が出現することなどから先行研究においては、アッカド時代以降の複数の時代の行政経済体制を宮殿、またそこに住む為政者を頂点とした「集権体制」という言葉で表現することが多い。とりわけウル第三王朝やバビロン第一王朝の集権化の問題については、質量両面で史料に恵まれていることから数多くの論考が提示されてきた。[35] 楔形文字資料の綿密な分析に基づくこうした論考は、政治史の分野のみならず、古代メソポタミア史研究全体において極めて貴重な成果として位置づけられているが、その一方で各史料から得られる情報について行われるべき時期間比較の視点に欠けるという問題点も併せ持っている。これはすなわち、アッカド時代以降の青銅器時代を構成する各時代が、宮殿を中心とする「中央集権国家の時代」と称される一方で、各時代の集権体制の内容にいかなる差異があるのかについて、複数の時代を対象とした文書間比較を経る形で充分に議論されてこなかったことを意味する。このように、時期間比較に余り注意が払われてこなかったのは、従来の古代メソポタミア史研究の著しい特徴であり、その傾向は行政経済体制史研究において殊に顕著である。こうした研究の状況は、発掘調査を行わねば得られない楔形文字資料を扱う必要がある文献史学研究全体の問題点を忠実に反映している。

これまでのメソポタミアでの発掘調査によって、文献史学研究の材料となる文字資料が大量に出土している。しかしそれらは解読に多大な労力を必要とする楔形文字で記されており、現代語に翻訳され、研究に資する形に整備された資料は量的に限られている。また、たとえ今後資料整備が著しく進んだとしても、文字資料が出土し

た遺跡はメソポタミアで確認されている遺跡の中でも限られており、比較研究に耐え得る分布状況を呈しているとは言い難い。さらに比較研究を困難にしているのは、文字資料で用いられている言語が、遺跡や属する時代によってまちまちなことから、研究者の専門分野の細分化が進行しているという事実である。現に複数時期を対象に行政経済体制を論じた研究は極めて少なく、いくつかの時代に言及していたとしても、それらの論考は各時代におけるこれまでの研究成果の概略をまとめたものに過ぎないことが多い。[36] こうした状況下において、制度史的な観点から時代間比較を行い、細分化された研究内容の再統合を図る必要性を指摘した佐藤進の論文[37]は、特定遺跡から出土した宮廷活動の記録、特に行政経済文書の内容を取り上げ、より短い時間枠の中でいかなる社会経済史上の特徴が認められるかを論じることに傾きつつある、行政経済史研究の中で異彩を放っていると同時に、青銅器時代の宮殿遺構の働きを考古学的に探るにあたり、重要な問題を提起している。

従来の建築学では、使用者の組織や制度は平面をはじめとする建築の構成を変化させる要因として考えられてきた。また青銅器時代のメソポタミア宮殿が常に王やその家族の生活の場であったと同時に、いわゆる公的活動の場としても国家運営上の必要に応じて適宜利用されていたことは、既に文献史料が明らかにしているところである。こうしたことを考慮すれば、宮殿の平面構成は王の私的空間よりも、公的活動の場においてより大きく変化し、その変化が宮殿の公的空間で活動していた人々の組織や制度の変容を反映する可能性が高いことを理解できよう。従って宮殿遺構の平面構成を遺跡間・遺構間比較を通じて考古学研究に利用するにあたっては、その変化が公的活動の変化を反映した結果であることを認識しておくべきと言える。宮殿遺構の平面構成に対する比較分析が、青銅器時代の諸国家の公的活動の変化に関する知見をもたらすことができれば、専門分野の細分化によって青銅器時代の行政経済体制の統合的把握が困難な状況にある文献史学研究に対し、考古学の立場から有益な知見をもたらすことができる。佐藤の言う制度史研究による時代間比較が将来的に文献史学研究者によって示される場合に備え、宮殿遺構の平面構成を通してその結果と対比し得る、宮廷活動の変容についての基本的な枠組みを提示しておくことは、古代メソポタミア史研究において重要な作業になるものと考える。

ただ、制度の時間的変遷に関連づけた行政経済体制史について、文献史学によって全く議論されてこなかったわけではない。特にハリスによるバビロン第一王朝の書記に関する一連の研究は、同王朝の行政経済体制に関して独自かつ興味深い論考を行っている。ハリスはシッパルから出土した行政経済文書群を扱いながら、この都市における書記の数が第五代の王シムムバッリト時代には一四名に留まっていたのに対し、次のハンムラピ時代には四九名、第七代サムスイルナ時代にも四二名と著しく増加したことを指摘した。その上でこうした傾向が同王朝の集権化の動きを反映していると位置づけている。[38] またヤンコフスカはヌジ文書を取り上げながら、そこに現れる *dimtu* と呼ばれる組織を「広範な家族共同体(extended family commune)」と見なし、それが行政経済的にアラプハ王国から独立した自治組織を形成していると考え、古バビロニア時代には見られなかった「分権化」が行われたと指摘した。[39] このような指摘は特定の文献史料を相対化し、他の文字資料ならびにそこから得られた成果と比較するもので、評価に値する。しかしこれらの論考は、一つの文字資料群を細かく分析している反面、他の時代に比定される文字資料との厳密な比較を行うには至っておらず、行政経済史研究において制度の比較研究による新たな歴史像を提示したとは言い難い。このように、専門分野の細分化が著しく進行している文献史学が、従来の方法によって青銅器時代における王を頂点とした宮廷活動の変容を明らかにし得る状況にあるとは考えにくい。一方で資料的蓄積のある宮殿遺構の平面を考古学の立場から扱うことで、現段階では文献史学によって明らかにできない、青銅器時代の宮殿における活動内容の変化について遺跡間・遺構間比較を通じて考察することができる。これは、青銅器時代の行政経済活動史などの総合的把握にとって極めて重要な作業になり得るものと考える。

宮殿遺構は王やその家族の住宅のみならず、国家の公的活動の場でもあった。専門分野の細分化が進行し、公的活動、とりわけ行政経済活動の展開を知ることが難しい文献史学の現状を考慮すると、宮殿遺構を考古学的分析の対象とするにあたっては、その平面構成の変化から公的活動の変容を導き出し、将来提示されるであろう文献史学による比較研究の成果と対比できるような見解を提示することを目的とすべきである。

この目的を追及するにあたっては宮殿遺構の平面を、

宮廷活動復元の資料として遺跡間・遺構間比較に耐え得るものに整備する必要がある。よって、今日までに蓄積されてきた遺構平面に関する情報の大部分を利用でき、かつ宮殿における人間の活動が具体的に推測できるよう、

① 遺跡によって多種多様な出土状況に耐え得るもの

② ドイツ学派によってこれまで取り上げられてきた平面分析法の中から、中庭の有無のように考古学研究に利用可能なもの

③ ドイツ学派およびその他の研究者グループ双方によって言わば「無視」されてきたものの、比較考察に有効かつ宮殿内での人間活動に関わるもの

の諸条件を満たす属性に着目した分析を進めていくべきである。

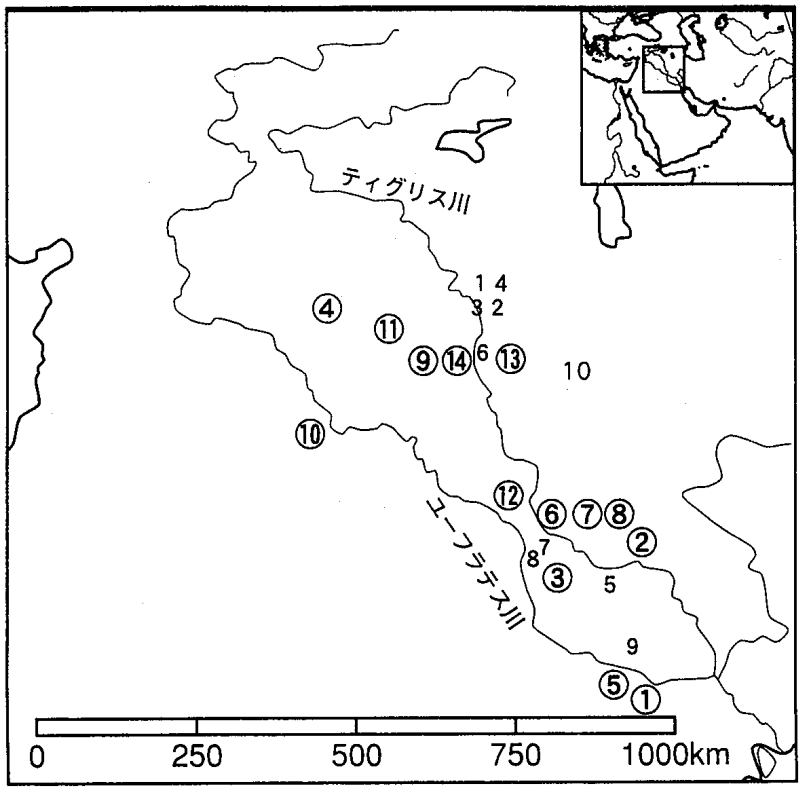
三　青銅器時代の宮殿建築遺構の概要と平面構成

(1) 青銅器時代の宮殿遺構の集成

本稿の目的の追求にあたり有効な属性選択を行うため、次に宮殿遺構に関する記録の特徴を概観し、資料としての全体像を明らかにする。これまでに筆者が確認した限りでは、調査継続中の遺跡を除き、今日までに発掘調査報告書において少なくとも二一のメソポタミア諸遺跡から出土した遺構が古代の宮殿として報告されてきた（第三図）。そのうち青銅器時代に属するとされる遺構を有する遺跡は一六にのぼり、複数時期の宮殿遺構を別個に扱うと同時代全体で一九の遺構を確認できる。よってメソポタミア宮殿遺構の調査報告が青銅器時代の資料に著しく偏っていることが分かる。同地域における古代の宮廷活動の変容を探るために必要な遺跡間・遺構間の比較を行う上で、青銅器時代遺構に対する考古学的分析が重要な位置を占めることを、こうした調査状況からも理解できよう。それらのうち五遺跡から出土した五遺構については、調査報告からだけでは文字資料の不足などから宮殿として利用されていたかが判然とせず、研究者間でも宮殿として取り扱うべきか否かについて見解の一致をみていない。

ただし、これら性格が定まっていない資料を除いても、青銅器時代の宮殿遺構として議論の対象とすべき資料の数は一四にもおよび、宮殿での活動内容の変化を考察するにあたって青銅器時代に属する遺構の分析が不可欠であることに変わりがないことが分かる。宮殿遺構を三時期に区分できるエシュヌンナや二時期に区分できるアッ

第三図　メソポタミアにおける古代「宮殿」遺構の位置（凡例は次頁）



シュールを除けば、同一遺跡内で平面構成の時間的変化を明確に把握できる遺跡はなく、これらの資料を時代間の比較研究に用いる場合、遺跡内の時期間比較よりもむしろ遺跡間比較が主たる方法になることが理解できる。

王やその家族の住宅としての機能と同時に各宮殿が持っていた、国家の公的諸活動の場としての機能を古代メソポタミア史の中で位置づけていくにあたって必要となる、遺跡間・遺構間の比較検討をなるべく多くの資料を対象に行うため、各資料全体もしくは大部分に共通する特徴について指摘する。その上で、各宮殿遺構から等しく得られる属性に関する情報を抽出する。これまでの古代メソポタミア建築研究において、建物内における人間活動に関わり、かつ充分に比較研究が可能な属性として取り上げられたのは、レンツェンが初めて注目した神殿の中央空間における屋根の有無のみに限られている。前述のように、屋根がない空間には形状や大きさの面で梁を渡すための制限がなく、屋根がある場合より、多くの室を周囲に配することが可能となる。よって屋根がない空間を動線上の中心点として諸室間の連絡を保てることで、目的の室に辿り着くまでに不必要な室を通過する可能性が減少することになる。屋根のない空間、つまり

時　　代		遺　跡・遺　構	調査報告書(一部)
初期王朝時代	①	エリドゥ	SAFAR 1950
	②	ララク	MADHLOOM 1960
	③	キシュ(P 建物含む)	LANGDON 1924
アッカド時代	④	テル・ブラク	MALLOWAN 1947
ウル第三王朝時代	⑤	ウル	WOOLEY 1923
古バビロニア時代	⑥	エシュヌンナ(シュイリヤ期)	FRANKFORT, JACOBSEN and PREUßER 1932
	⑦	エシュヌンナ(ピララマ期)	
	⑧	エシュヌンナ(イバルピエル1世・イビクアダド2世期)	
	⑨	アッシュール(古宮殿；シャムシアダド1世期)	PREUßER 1955
	⑩	マリ	PARROT 1958a
	⑪	カラナ	OATES 1966
カッシート・ミタンニ時代	⑫	ドゥル・クリガルズ	BAQIR 1945
	⑬	ヌジ	STARR 1939
	⑭	アッシュール(アダドニラリ1世期)	PREUßER 1955
宮殿としての性格が不明確な遺構	4	シャリフ・ハーン	LAYARD 1853
	5	アダブ	BANKS 1912
	7	ジェムデッド・ナスル	LANGDON 1928
	9	ラルサ	PARROT 1933
	10	バクル・アワ	

なお地図中の1(コルサバード)、2(ニムルド)、3(ニネヴェ)、6(カル・トゥクルティニヌルタ)、8(バビロン)はそれぞれ鉄器時代の宮殿遺構が確認されている遺跡の位置を示す。

中庭の存在は周囲各室の機能上の独立に対する要求を満たすことにつながると考えられたのである。この考え方は、中庭とされる空間が複数存在することが、多くの発掘調査報告書で指摘されている宮殿の平面研究においても無視できない。それは、もし宮殿において中庭の存在が事実だとすれば、それらを中心とした機能別室集合が形成されている可能性が高く、王やその家族の生活以外にも、多種多様な活動が宮殿遺構においてなされていたと考えることができるからである。しかし、特定空間が中庭であったか否かについては、古代ギリシア・ローマ建築と異なり、基礎部しか確認できない古代メソポタミア建築から知ることは困難である。従って宮殿遺構の役割の多様化についての議論を深めるには、現在入手可能な資料、つまり空間と空間との連絡の状況によって把握することが必要だと言える。各室が周囲のどれだけの室と連絡しているかを分析し、各宮殿遺構において動線の中心となっている空間、つまり「中庭的」な空間が存在するかどうかを把握することで、遺構機能の複雑化を知る上で有効な情報を得ることが可能となるのである。青銅器時代のメソポタミア宮殿遺構は、テル・ブラクとアッシュール（古宮殿）を除く全ての遺構で室間連絡の状況を把握できるため、こうした比較分析に適した資料群と言える。

また、遺構全体を完掘し得た発掘調査はごくわずかである。ヌジやマリのように、報告書において詳細な平面構成分析を展開している遺構であっても、自然の営力による浸食などによって、宮殿として利用されていた当時の平面構成が完全に明らかになるには至っていない。さらには、テル・ブラク、ウル、エシュヌンナそしてアッシュール（古宮殿）を除けば発掘調査の方法自体が完掘を目指したものではなく、記録されていない部分は未だテルに埋没している可能性が高いのである。従って遺構全体の規模や、ドイツ学派が神殿遺構を対象に議論してきたような遺構全体の形態を多くの遺構で確認することは困難である。特に遺構全体の規模は、古代世界においては使用者の政治力や財力を反映しているとされており、[40] これまでメソポタミア考古学の概説書で盛んに取り上げられてきたが、比較研究に取り上げられるべき属性ではないことがわかる。しかし、規模に関する情報を建物全体ではなく、個々の室空間レヴェルで捉えれば、規模が使用者の行動を規定する重要な要素となり得ることが理解できる。つまり個々の部屋が大きいことは、それだけ

活動可能人数の増加を許容できるだけではなく、同じ距離を移動するにあたっても途中が壁面によって区切られた別空間よりも動線が単純で、それだけ効率の良い動きが可能となることを示唆するのである。加えて一定面積の敷地により多くの壁面を設けることは、室配置を含めた建築計画の作業をより複雑にし、建設費用をより高価にすることにもつながる。その一方で、より小さな室を持つことで少人数による専門性を持った作業を効率よく行える空間をより多く確保することができる。すなわち、小さな室がより多く検出されることは、以上で挙げた様々な悪影響以上に、官僚たちの公務を中心とする国家の行政経済活動の効率化がより重視されていたことを意味するのである。空間の規模については、カラナを除けば各遺構で少なくとも二〇部屋以上について分析可能であり、この種の分析に適した資料群だと言える。

以上のような観点に立って、本稿では本節で挙げた宮殿遺構のうち、小規模な調査しかなされていないカラナ以外の資料を対象に、室間連絡の状況と共に、従来着目されなかったものの遺構の機能を考える上で極めて重要な、いかなる規模の室が遺構の中で数量的にいかなる割合を占めるかについての把握を試みる。こうして宮殿遺構における機能の複雑化に関する分析を行い、青銅器時代の各宮殿遺構がいかなる役割を果たし、その役割、特に公的な役割が時間の経過と共にいかに変化したかについて、前述の文献史学の成果と対比しつつ考察する。

（2）室間の連絡

まず青銅器時代のメソポタミア宮殿遺構における活動の多様化を表す上で重要な指標となる、他の室より多くの周囲の室と結ばれている室、つまり「中庭的」な空間の有無を確認した。先述のように、利用されていた当時の状況で出土している遺構は極めて少ない。また室間連絡が判明している遺構であっても、全ての室において周囲の空間との連絡を把握できる状態にあるわけではないことから、「何室と結ばれている空間があるか否か」という定性的表示により、各遺構間でいかなる差異が見られるかについての分析を行った。テル・ブラク、アッシュール古宮殿そしてカラナを除く全ての遺構について、連絡状況を把握できる空間がいくつの隣接空間とつながっているかをそれぞれ計り、その結果を第一表に示した。

これを見ると、初期王朝時代からカッシート・ミタン

第一表　青銅器時代のメソポタミア宮殿の室間連絡

	遺構	1部屋	2部屋	3部屋	4部屋	5部屋	6部屋	7部屋	8部屋以上
初期王朝時代（アッカド時代）	①	◎	◎	◎	◎	○	○		
	②	◎	◎	◎	◎				
	③	◎	◎	◎	◎		○		
ウル第三王朝時代	⑤	◎	◎	◎		○	○		
古バビロニア時代	⑥	◎	◎	◎	◎	○	○		
	⑦	◎	◎	◎	◎	○	○		
	⑧	◎	◎	◎	◎			●	
	⑩	◎	◎	◎	◎	○	○	●	●
カッシート・ミタンニ時代	⑫	◎	◎	◎	◎			●	
	⑬	◎	◎	◎	◎	○	○		●
	⑭	◎	◎	◎	◎	○	○	●	●

○付数字は第三図の遺構番号に対応している。

ニ時代を通じて、青銅器時代のメソポタミアにおいては、一～四室と通じている空間が普遍的に存在している一方で、七以上という多くの室と連絡している空間が、宮殿遺構においては古バビロニア時代になって初めて現れることが分かる。古代メソポタミアにおける室空間は矩形を基本としていることを考えれば、室が一般に四以下の空間と隣接することは容易に想定し得る。これとは対照的に七室以上と連絡する室は、平均すれば少なくとも四辺のうち三辺に、二室以上に通じる開口部が設けられた空間であり、その存在は、周囲の空間配置においてより綿密な平面構成計画を必要としたと同時に、室間連絡においてより中心的な役割を果たし得たことを意味する。そうした視点に立てば、この分析結果は古バビロニア時代に至って宮殿において機能により場所を分ける方法が、平面計画において明確に意識され始めたことを示唆すると言える。もちろん、多くの遺構が不完全に明らかにされている状況においては、いわゆる「ないことの証明」は難しく、ウル第三王朝時代以前において機能上中心的な役割を果たしていた部屋が存在しなかったことを完全に証明することはできない。しかし、古バビロニア時代より前の時代において、七室以上と連絡している空間が

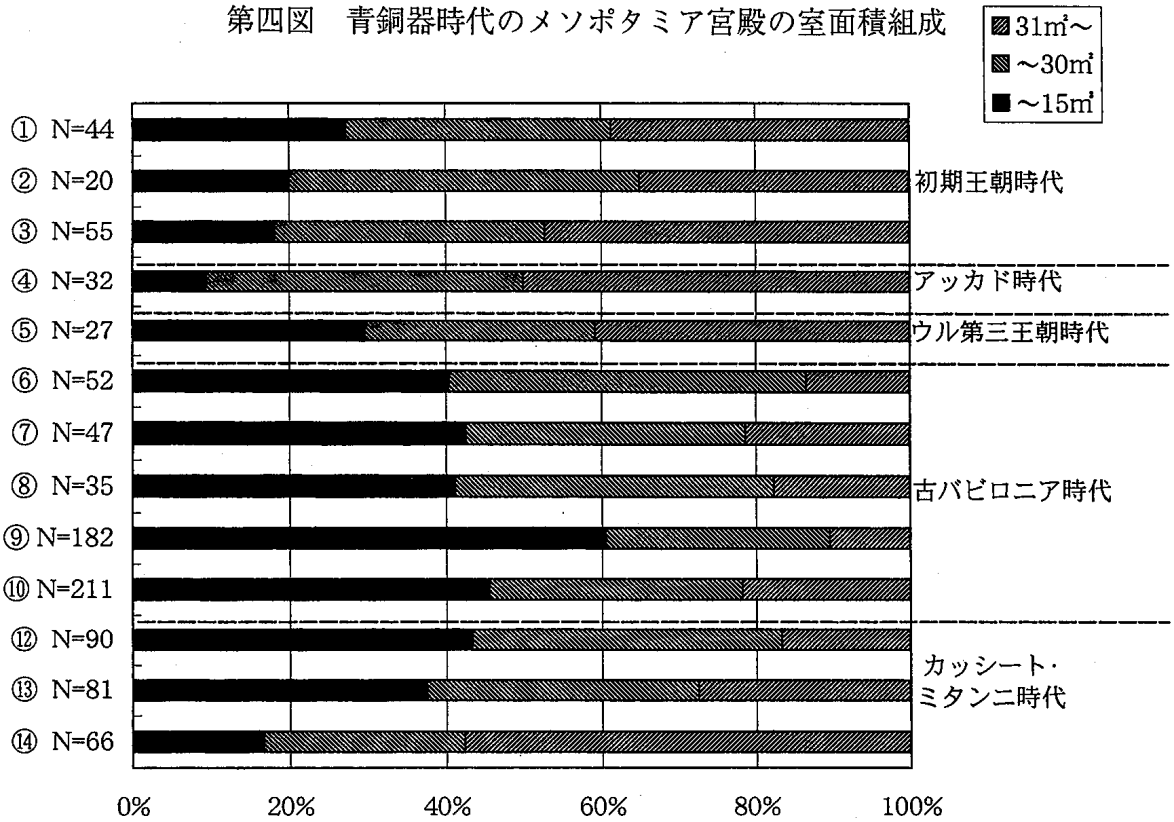
全く発見されていない事実は、前二千年紀初頭に宮殿の平面計画の伝統が一定度変化した可能性が高いことを示していると言える。

（3）室面積の組成

次に問題とするのは、いかなる活動を重視した平面計画を行ったかについて貴重な情報をもたらす室空間の規模である。空間規模は、前節で行った室間連絡の分析のように、使用者がどのような動線を描いていたかという、複数の室における人間活動を示すものではない。しかし同時に損壊が著しく室間連絡が不明な空間をも分析対象に加えることができ、基礎部の記録のみに注力する傾向があった発掘調査報告書の遺構平面図からより多くの情報を抽出することができる属性でもある。よって規模を通した遺構の平面構成と機能に関する議論に適した「何㎡の空間がいくつあり、それが遺構全体のどれだけの割合にあたるか」という定量的表示に耐え得る情報量を備えていると言える。このように空間面積の組成を遺跡間・遺構間で比較することにより、遺構が王やその家族の私的空間として使われていたのか、私的空間であると共に国家の公的活動の場でもあった可能性が高いのかを推定することができる。第四図はそうした考え方に基づいて作成した、空間面積組成に関するグラフである。

その結果、空間面積の組成は時代間で大きく異なっていることが理解できる。とりわけ一五㎡未満の空間の割合が時代によって激しく変動しており、古バビロニア時代とその前後の時代では、著しい差異があることが大きな特徴として認められる。初期王朝時代からウル第三王朝時代にかけては二割前後ほどしかなかった小規模な部屋は、古バビロニア時代においては総じて四〇％以上の割合を確保し、カッシート・ミタンニ時代に至ると再び減少していることが分かる。一五㎡未満の空間は一人や二人といった、ごく少数の人間で利用されていた可能性が高い。青銅器時代のメソポタミア宮殿は、常に王やその家族の住宅としての機能を果たしていたが、そうした私的空間において構成人員や働きに大きな変化があったとは考えにくく、機能が平面構成に一定度反映されているという建築学的立場に拠れば、このような小規模な部屋の割合の増減が王の私的空間の平面構成の変化を指し示している可能性は低い。このような面積組成の一連の変化は、外交使節や官僚集団など多くの人間が必要に応じて出入りする公的空間、つまり国家の公的活動の場の

第四図　青銅器時代のメソポタミア宮殿の室面積組成



○付数字は第三図の遺構番号に対応している。

変化により大きく依存していると捉えるべきである。従って、古バビロニア時代の宮殿遺構における小さな部屋の占める割合が、他の時代のそれよりも高いという本分析の結果は、王を頂点とする国家の公的活動が、古バビロニア時代において他の時代に比べ多様で、複雑な内容を有していた証左となり得る。ただし、マリにおいては、サービスなどに従事した労働者の住宅と考えられる室集合の存在がジムリリム宮殿の中に確認されており、(41) 古バビロニア時代宮殿遺構に見られる平面の変化が、公的活動の場と「労働者たちの私的空間」の構成の変化を同時に意味している可能性は充分にある。しかしこれは結果として公的活動の多様化を背景としたサービスの大規模化を同時に意味するもので、王の私的空間の変容に原因するものではないと考える。

（4）ヌジとマリにおける機能別室集合の室面積組成

室間連絡に関する分析によって、青銅器時代のメソポタミア宮殿は古バビロニア時代に至って王やその家族の住宅としてだけではなく、国家の公的活動の場としても使用されることを意図した平面計画に従って建設されるようになったことがわかった。また室面積組成の分析に

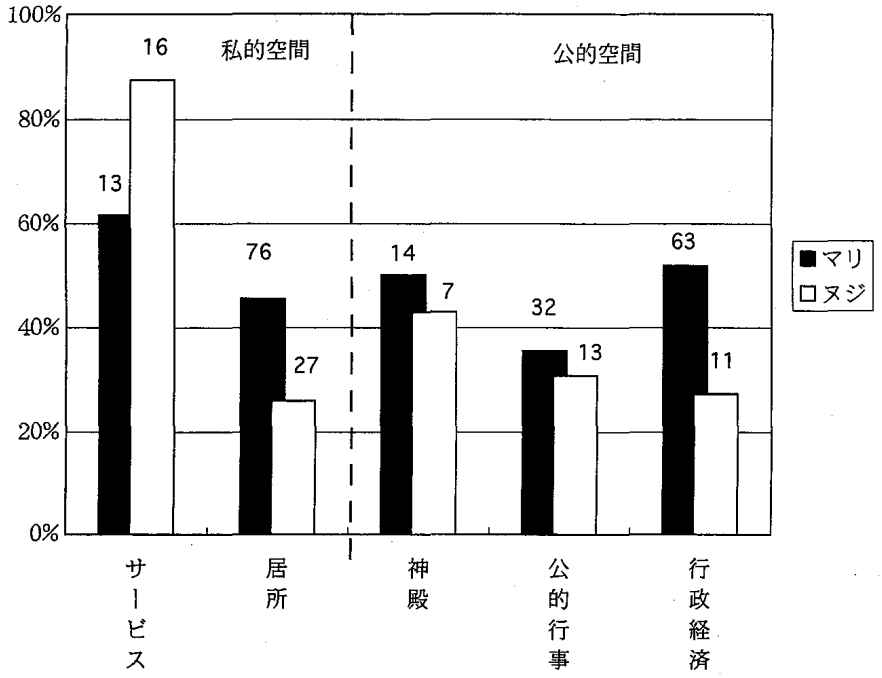
よって、古バビロニア時代の宮殿遺構が他の時代のそれらに比べてより複雑な公的活動に耐え得る平面構成を有していた可能性を指摘した。だがその一方で様々な内容を併せ持っている国家の公的活動のうち、具体的にどの活動がより大きく変容したことで、平面構成の変化に影響を与えるに至ったか、という問題については未だ明らかにしていない。青銅器時代宮殿の持つ歴史的意味の変化を探ることを目的としている本稿にとってこれが不可避の問題であることは確かだが、前章までに論じてきたように青銅器時代宮殿に関する記録の大半は、この種の分析に対して有益な情報をもたらす内容を含んでいない。換言すれば、どの活動の場の平面構成がどの程度変化したかを知るには、宮殿で行われていたことが文献史料から断片的に知られている諸活動が、それぞれ各宮殿内のどこで行われていた可能性が高いかを予め把握しておく必要があるにも関わらず、この問題について発掘調査報告書やドイツ学派の研究の多くは注目すべき知見を示すことなく現在に至っている。これに対してスタールらによるヌジ、パローらによるマリの調査では、前述のように機能別室集合の複合体として宮殿遺構を捉えることで、各活動空間の平面構成の変化という問題を取り扱うことを可能にする資料整備を行っている。彼らは両遺跡の宮殿遺構をそれぞれ王やその家族などの「居住部分」、「サービスに関連する部分」、「神殿」、外交使節の謁見や儀式などに用いる「公的行事に関連する部分」そして官僚たちが国政に関する仕事を行っていた「行政経済活動に関連する部分」などに分割し、宮殿遺構が様々な機能を併せ持っていたことを示した。これらの分析結果が、青銅器時代のメソポタミアにおける宮廷活動の具体像を把握する上で貴重な知見をもたらしていることは間違いない。その一方で他の遺跡の調査報告の内容との間に著しい隔たりがあるため、その方法をメソポタミアの青銅器時代の宮殿遺構全体に適用し、各機能別室集合の平面構成の変化を探る、という本稿の目的を果たすにあたって理想的な分析を実施できないことは、マルグロン論文の方法の限界を見ても明らかである。(42)

しかしヌジとマリの宮殿遺構はどちらも古バビロニア時代以降に属し、宮殿での活動が多様化したと考えられる時期に使用されていたこと、そして両者はカッシート・ミタンニ時代および古バビロニア時代という別時代の資料であることから、前節で明らかになった古バビロニア時代以降の室空間規模からみた平面構成の変化の背

景を説明するにあたって重要な示唆を与えるものと考える。つまりカッシート・ミタンニ時代に至って再び一五m²未満の小さな室の割合が減少していく理由について、機能別室集合ごとの遺構間比較を通じて具体的に指摘できる可能性があるのである。そこで前節と同じく小規模な室の割合に注視しながら、ヌジとマリの宮殿遺構の機能別室集合の各面積組成について、両遺構でいかなる差異が認められるかについて分析を行った。機能別室集合の分割の方法ならびに結果は第一図ならびに第二図に従った。

その結果を第五図で見ると、ヌジの宮殿遺構においては、サービスに関連する部分以外、特に公的活動の場ではいずれの部分においても一五m²未満の小規模な空間の割合がマリのジムリリム宮殿より減少していることが分かる。さらに公的活動の場を細かく見ると、神殿や公的行事に関連する部分に比べ、行政経済活動に関連する部分でその減少が著しいことがわかる。ジムリリム宮殿の行政経済活動に関連する部分においては半数以上を占めていた一五m²未満の部屋が、ヌジの宮殿では四分の一程度にまで落ち込んでいる原因をいずれに求めるかについては、複数の見解が提示されよう。記録された部分の面

第五図　15m² 以下の室が占める割合
（グラフ内の数字はＮ値）



「行政経済」は「行政経済活動に関連する部分」、「公的行事」は公的行事に関連する部分、そして「サービス」はサービスに関連する部分であることを示す。

積が両者で大きく異なることから、ヌジの行政経済活動に関連する部分は未だその一部しか明らかにされておらず正確な比較結果ではない、という遺構残存状態の差異に関連づけた意見も提示し得る。しかし、マリにおいては宮殿の中心部をなす公的行事に関連する部分の東西両面に行政経済活動に関連する部分が置かれていたのに対し、ヌジの宮殿の公的行事に関連する部分の周囲には少なくとも二面にわたって王やその家族の居所といった私的空間が広く配されていた。このことを考え併せると、本分析によって得られた結果は、古バビロニア時代以降の宮廷活動における行政経済活動の重要性の変化を少なからず反映していると考えられ、カッシート・ミタンニ時代の宮殿における官僚たちの活動内容が、前時代に比べて限られていた可能性を示していると言える。

（5）分析結果の要約

以上、青銅器時代のメソポタミア宮殿遺構の出土状況を概観し、その考古学資料としての特徴を明らかにした上で、室間連絡状況および室面積組成に関する平面構成の遺跡間・遺構間比較を行った。その結果、明らかになったのは以下の点である。

① 青銅器時代のメソポタミア宮殿遺構は一一遺跡一四遺構と限られてはいるものの、青銅器時代の全ての時期で確認され、またこれまでに確認された古代メソポタミアの宮殿遺構の六割以上を占めている。

② 一三の宮殿遺構でそれぞれ二〇以上の室が基礎部を明確に残す形で出土している。また一一遺構においては室間連絡の状況が記録された平面の一部もしくは全てで確認できる。これらのことと①から、青銅器時代のメソポタミア宮殿遺構は平面の遺跡間・遺構間比較に適した資料であることがわかる。

③ 青銅器時代全体を通じ、四辺形を室の基本形状とするメソポタミア宮殿遺構では、一部屋から四部屋と通じている空間は普遍的に存在する一方で、七室以上と連絡している空間は古バビロニア時代に至って初めて見られるようになる。これは同時代の宮殿において機能の多様化への対応を、平面計画において明確に意識し始めたことを示すものと言える。

④ 初期王朝時代からウル第三王朝時代までは二割ほどしかなかった一五m^2未満の小規模な室空間は、古バビロニア時代の各宮殿遺構においては四割前後を占め、カッシート・ミタンニ時代に至ると再び減少

していく。これは国家の公的活動の場での活動が、古バビロニア時代において他の時代よりも複雑な内容を有していたことを示しており、動線の変化を示唆する③と矛盾しない結果が得られた。

⑤　マリのジムリリム宮殿の各機能別室集合における一五㎡未満の小さな室空間の割合は、ヌジに比べてサービスに関連する部分以外で大きく、とりわけ行政経済活動に関連する部分においてはその差が著しい。これは、古バビロニア時代に属するマリの官僚たちの活動内容が、カッシート・ミタンニ時代に属するヌジの行政経済活動に比べてより多様で、大きな組織を必要としていた可能性を示唆している。

四　青銅器時代のメソポタミアにおける宮殿平面構成と機能

(1)　宮殿における公的活動

これまでの古代メソポタミア文献史学研究は、言語の難解さ、文字資料が出土した遺跡の偏りなどによって専門領域が細分化され、結果として時代間比較分析を避ける傾向を強めてきた。従って、青銅器時代宮殿における公的活動を担った組織や内容に時代間でどのような差異があるかについては、充分に明らかにされてきたとは言い難い。そうした点を明らかにするためには佐藤がかつて指摘したように制度史的な研究が必要となろうが、先述のハリスやヤンコフスカの論文に見られるような制度の変化に関する議論が見られる古バビロニア時代以降の研究とは対照的に、ウル第三王朝時代以前を範囲とした論考はあまり見られなかった。特に「中央集権国家の時代」と呼ばれることの多いアッカド時代やウル第三王朝時代においてこうした研究が見られないのは、宮廷活動、特に公的活動の変化を考察する上で極めて深刻な状況を生起している。

しかし近年、ウル第三王朝時代の制度史を明らかにしようとする動きがようやく見られるようになった。ポストゲートはこの分野の研究が著しく停滞していることを指摘する一方で、同時代の王や官僚の役割に関する史料の豊富さを取り上げ、制度研究が不可能ではないことを説いた。[43] 彼が特に注目しているのは、ウル第三王朝が「文民の階層制度」「軍人の階層制度」という二重の行政制度を持ち、地方の共同体における有力者を地方行政や軍の指導者に任じて統治させていたという事実である。[44] 同王朝に先行するアッカド帝国においても見られるこの

制度は、共に「中央集権国家の時代」とされている古バビロニア時代の統治制度とは異なる性格を持っていると考えられる。古バビロニア時代の中でもバビロン第一王朝は、メソポタミア全土を対象に大規模な征服事業を推進しており、そこで得られた土地は優先的に王の直轄領に編入され、王直属の官僚たちによって管理されていたことがわかっている。また、塩化による土壌の悪化やユーフラテス川の流路変動に伴う大規模な公共事業においては、諸都市や地方の共同体が提供する労働奉仕で対応していたウル第三王朝時代までとは違い、王や官僚が直接編成した組織によって行われていたことも明らかにされている。[45] 一連の事実は古バビロニア時代の王朝の制度を直接表すものではなく、他の時代の王朝の公的活動との比較を行うにはさらなる史料の解読と、ハリスらの制度史研究に見られるような緻密な分析を積み重ねていく必要があるが、地方有力者による二重統治制度を採用していたウル第三王朝時代の集権化と、国土に王の直接支配が行き届いていた古バビロニア時代の集権化が同等の内容を持っていたとは現時点では考えられない。

青銅器時代宮殿の平面構成に対する分析は、この見解に相反しない結果をもたらしている。室間連絡の状況に関する分析では、ウル第三王朝時代から古バビロニア時代へ移行する過程で、機能により場所を分ける平面計画が宮殿建築に導入されるようになったことがわかった。この結果は宮殿が王室の住宅として機能していただけではなく、上に挙げたような様々な国家の公的活動をも担う建築物へと変化したことを強く示唆している。動線上の中心とも言える空間が存在することによって、建物内の人々はある限られた空間であればより効率的に目標へ移動することが可能となると考えれば、七部屋以上という多くの室と連絡する空間が宮殿において現れるようになる古バビロニア時代は、王室以外の人々も参加した国家の公的活動を加えることで、宮廷内の活動が大きく複雑化した時期と捉えるべきである。また部屋面積組成に関する分析結果からも、王を頂点とする国家の公的活動が、古バビロニア時代において他の時代に比べて多様で複雑な性格を持っていたことを把握できる。古バビロニア時代の宮殿遺構が、他の時代のそれらよりも小規模な空間をより多く含んでいたという事実は、王室のための私的空間が彼らの趣向によりその構成を変化させたとするよりも、王に謁見する外交使節や市民、また行政経済活動を担っていた官僚といった多くの人間が出入りする

公的活動の場が、活動内容の多様化によってより細かな平面構成を必要としたことを示していると解釈すべきである。

（2）古バビロニア時代における行政経済体制の変化

このように前二千年紀初頭に始まる古バビロニア時代の宮殿において、公的活動が重要視されていたことは、宮殿遺構および文献史料の両面から確かめられる。ところが、既に述べてきたように儀式や謁見、行政経済活動など多様な内容を併せ持っていた当時の公的活動全体の中で、古バビロニア時代以降にどの部分が大きく変容したかというより細かな問題については、文書間比較の視点に欠ける文献史学の立場から論じられることはなかった。そうした中で制度史に関して言及したハリスやヤンコフスカらの研究は、特定文書に対象を限定しているものの、前二千年紀の国家の公的活動における行政経済活動の変容の大きさを探る上で貴重な情報をもたらしている。[46] 両者の研究を比較した限りでは、古バビロニア時代においては官僚組織を用いた王による集権化が進行していたのに対し、その後のミタンニ時代においては地方共同体の自治組織によって、為政者の行政上の権限が著しく制限されていたことが理解される。ただし留意すべきは、こうした制度史的な理解が厳密な史料間比較に基づいていないという点である。今後の文字資料の解読作業などによってこの研究上の空白が埋められていくと予想されるが、特定資料群への関心の集中が顕著な文献史学研究においては、近い将来に文書間比較を可能にする資料整備が大きく進展することは望めない。その一方で青銅器時代の宮殿遺構の平面を利用した考古学研究が文献史学の欠点を補完することもまた容易ではない。これまでに見てきたように、宮殿遺構に関する記録の大半は、出土場所の機能を特定するのに有効な遺物の報告を充分には行っておらず、遺構内のどこで何が行われていたかを知ることは困難な状況にある。それゆえ機能別部屋集合の状況を明らかにでき、かつ宮殿での活動が多様化したと考えられる時期に使用されていたヌジとマリの両宮殿遺構は、既に見てきた古バビロニア時代以降の平面構成の変化の背景を理解するにあたって極めて重要である。そこで両宮殿遺構の各機能別部屋集合の空間面積組成を分析した結果、ヌジの宮殿遺構はマリのジムリリム宮殿と比べて小規模な部屋の割合が著しく低く、ヌジにおける官僚たちの行政経済活動の内容が、古バビロニア時代

のそれに比べて限られていた可能性を指摘できた。

一連の分析結果を総合すると、青銅器時代の宮殿遺構の機能の変化については、公的活動、特に行政経済活動の変遷によって少なくとも三つの段階を設定することができる。それは、

① 初期王朝時代からウル第三王朝時代
② 古バビロニア時代
③ カッシート・ミタンニ時代

の三時期である。

まず初期王朝時代からウル第三王朝時代においては、宮廷内によく組織化された官僚集団が存在した可能性は低く、王による宮殿内での公的活動の重要性もさほど高くなかったと考えられる。この時期の制度史についてはなお不明な点が少なくないが、戦争や灌漑工事など国家が執り行う事業が都市国家の王や地方支配者（エンシ）を中心として遂行されていたことが、文献史学研究によって断片的に知られている時代と一致している。次の古バビロニア時代は大規模な官僚組織を宮廷内に抱え、集権的な制度のもとで宮殿が国家運営の中枢を担っていた。この時代も決して制度史研究が進展しているとは言い難いが、ハンムラビなどの諸王が積極的に集権化政策を推進していたことが判明しており、そうした動きが少なからず制度にも反映していたことがハリスらの研究によって明らかにされている。そして青銅器時代最後のカッシート・ミタンニ時代に属するヌジの宮殿に対する分析からは、行政経済活動に関連する部分のさらなる複雑化の傾向は確認できなかった。文献史学研究においては、ヤンコフスカの研究などでこの時代に王権の退行現象が見られることが指摘されている。

このように青銅器時代の宮殿遺構の平面構成を比較することによって、前三千年紀から前二千年紀にかけての宮廷活動が古バビロニア時代を軸として大きく変化していたことが分かる。この時代の宮殿は、為政者の私的空間としての意味が最も重かったであろうウル第三王朝までの宮殿遺構とはもちろんのこと、古バビロニア時代以上に細かな平面構成を計画することのなかったカッシート・ミタンニ時代のそれとも大きく異なった意味を持っていたと考えられる。古バビロニア時代の宮殿は王の私的空間に国家の公的活動の場としての機能が初めて加わった、ある種の複合体を形成するに至り、特に行政経済活動の場として活発に機能しながら王による集権化の一翼を担った可能性が高い。研究分野の細分化が著しい

文献史学研究において、それぞれ「中央集権国家の時代」として一律に捉えられてきたアッカド時代以降の青銅器時代のメソポタミアで、古バビロニア時代以上に強力な集権的行政経済体制が他の時代にしかれていたとは考え難いことを、宮殿遺構の考古学的分析によって明らかにし得た。

（3）考古学研究における平面構成分析

集権化の差異の問題については、文献史学において文書間比較を基本に据えた制度史研究が活性化することでより明らかになるはずだが、前述の通り近い将来にこの種の研究が大きく進展する可能性は極めて低い。それは「シュメール学」「アッカド学」「ウラルトゥ学」といった名称に見られるように古代メソポタミア文献史学の細分化が決定的になっているからに他ならない。二〇〇年以上の伝統を有する文献史学の伝統が劇的に変化するとは考えられず、青銅器時代や鉄器時代という大きな時間枠の中である事象の変化を探る研究が数多くもたらされるにはしばらく時間が必要だと言える。そうした中で、文献史学研究の方法論的問題点を遺構や遺物に対する分析によって補い、考古学の立場から新たな歴史像を早急に提示することは、古代メソポタミア史研究全体の発展にとって重要な意味を持つ。

しかし特に遺構に関しては、小林ら少数の研究者によって機能別部屋集合に対する関心が示されたにせよ、多くのドイツ学派が建築史学的考察の対象としてきたことで、歴史研究の資料としての位置づけが不明確になってしまったと言える。よって平面に関しては一部を除いてほぼ均質な調査記録がなされているという好条件を備えているにも関わらず、遺跡間・遺構間の比較検討による考察という、考古学研究においてはごく通常の手法すら適用されないまま今日に至っている。本稿はこうした先行研究の問題点を考慮し、考古学資料として宮殿遺構を明確に認識した上で、有効な研究方法を模索することを青銅器時代の宮廷活動の変容の把握と併せて目的とした。その結果、立面の記録が望めない古代メソポタミア宮殿遺構についても、適切な資料整備を行うことで考古学的な議論が充分に可能であることを明らかにできた。

古代西アジア建築を対象とした考古学研究における平面構成分析の有効性は、先述のようにほぼ均質な調査記録が各遺構から得られている点にある。建築遺構を対象とした研究において、これまで余り注目されることのな

かった室間連絡や部屋面積をもとにした分析は、遺構平面の調査が等しく充実している西アジアにおいて極めて重要な意味を持っており、本稿で示した手法は遺構の機能を含め、様々なテーマの研究においても同様に展開されることが期待される。

【謝辞】

本稿を草するにあたり、慶應義塾大学の小川英雄教授、鈴木公雄教授、阿部祥人教授、棚橋訓助教授、渡辺丈彦氏そして日本大学理工学部建築学科の柳田武先生には多くのご助言を頂いた。さらに、三沢伸生、有村誠、田畑幸嗣、津本英利、富田徹、神谷史穂の各氏には文献探索などで御協力頂いた。併せて謝意を表する。

注

(1) 熊倉洋介ほか一九九五　七―一六頁

(2) 宮殿に関する定義を示す言葉として最低限かつ最も一般的なものは「王の住宅」である。西アジア考古学においては従来、特に先史時代や原文字時代を中心に遺跡内の他遺構との規模、部屋数、壁厚などの比較の結果宮殿と称されている遺構が数多く存在する(LEICK 1988 pp. 155-159)。厳密には建築碑文もしくは共伴資料として出土する粘土板文書などの文字資料によって、建設者もしくは改築者が為政者であることが判明した資料のみを宮殿と呼ぶべきではあるが、文字資料以外の共伴遺物の出土状況によって「世俗的な公的建物」として扱うことで見解の一致をみている遺構については、本稿でも宮殿として取り扱っている。

(3) 岡田保良一九九三　三三頁

(4) 小林一九五九

(5) ダメルジ一九八七

(6) コルデヴァイはカルデア時代のバビロン出土遺構群を言語学用語を借用しながら接続形と命令形とに分類した。接続形は複数の室群からなる建物で、あたかも植物的成長力を連想させるような外観を呈するもの、とされる。また命令形は囲いや周壁の内部を、秩序立てて配した空間で埋めたもの、とされる(KOLDEWEY 1911 pp. 14-15)。その後若干の補正はあったものの、この分類は今なお古代メソポタミア建築を対象とした平面型式研究において基本的方法として受け入れられている。

(7) LENZEN 1955 pp. 21-44. これによると、古代メソポタミア神殿の平面型式は次のような変遷を辿る。

① メソポタミアの南部でも北部でも神殿型式の成立は単室から出発する

② 南部では、祭壇と供物台が室内から中庭へと移行する。これを「シュメール型神殿」と呼ぶ

③ 北部では、供物台を置く主室は室内に留まり、その空間が拡大する。これを「東ティグリス神殿」と呼ぶ

④ 続いて北部およびディラヤ川流域では、「東ティグリ

ス型式」の一類型として曲がり軸型式の「竈付き住宅型(Herdhaus)神殿」が普及する

⑤ アッカド時代からウル第三王朝時代にかけて、「シュメール型神殿」が衰退し、幅広室(Breitraum)の内陣を持つ「バビロニア式中庭住宅型(Hofhaus)神殿」が成立する

⑥ 北部でも、前二千年紀半ば以降「バビロニア式中庭住宅型神殿」が普及する

このように、中庭の有無や中央空間の形状といった、複数の属性を相互に余り関連づけることなく用いる煩雑な分類法は、レンツェン論文以降の平面型式研究の特徴の一つである。

(8) 小林上掲書 二五—四二頁・二一〇頁

(9) 小林による前二千年紀初頭までのメソポタミア神殿遺構平面の型式分類については、前掲書 四九—一一〇頁参照。

(10) 小林は遺構内の特定空間が有蓋かどうかを定めるにあたって、古代メソポタミア建築の形態的特徴、つまり室空間のほとんどが矩形をなすことに着目している。彼はウバイド期からウルク期にかけてのテペ・ガウラXX層からIX層において確認された神殿や住宅などの「中央広間」を例に挙げ、その長辺の変位幅に対して短辺長が大きく変化しないことを指摘した。その上で「梁を渡すための制限に原因があるのではなかろうか」と推測し、広間説を採用している(小林上掲書 二六—二八頁)。室と室との連絡という過去の人間活動に直接関わる中庭についての議論を、これまでの古代メソポタミア建築研究において扱われることの無かった室の寸法という新たな属性の分析を導入することで決着を図ろうとした小林の試みは、画期的と言えよう。ただ、梁を渡すために必要な室の寸法は上部構造などに強く依存するため、基礎部の状況しか知り得ない現代において、屋根の有無に関する確証を掴むのは極めて困難である。

(11) 堀内一九六四

(12) HEINRICH 1982

(13) ダメルジによれば、古代メソポタミア建築においては次の四種類の室群が見られるという。

1. 連鎖形：各部屋が基本線で結ばれており、目的の部屋までに複数の部屋を通って立ち入る構成をなす
2. 平行形：縦長形の部屋が横並びにされ、各部屋の扉が長廊下か中庭に向かって開いているもの
3. 三分形：中央部の縦長室の両長辺上に部屋が連なるもの
4. 中庭周りの横臥形室群：中庭や広間沿いに並んでいる幅広室の集まり

各遺構をこのように部分別集合に分類した上で、ダメルジは各室群がどのような形状の室で構成されているか、レンツェン以来議論されてきた神殿遺構全体の平面型式といかなる関係を持っているかを論じた(ダメルジ上掲書)。

(14) 注(6)参照。

(15) POSTGATE 1992 pp. 137-143

(16) これまでに出土した粘土板文書などの文字資料の翻訳出版が世界各地で続けられているが、現状で研究に利用できる形に整備された資料には、出土遺跡において顕著な偏りがあるため、宮殿であることが確認されていないものの、文献研究の成果によっては史料が共伴した遺構を宮殿として扱う必要が生じる遺構が今後現れる可能性も否定できない。例えば、アッカド帝国の王宮があったと予想される王都アガデのように、文献上では存在が確認されているものの、実際には所在が不明なままの遺跡も複数存在する。

また、イェール大学を中心とする米国隊が調査しているテル・レイラーンの調査では、出土した文字資料から、同遺跡が古アッシリア王シャムシ・アダド一世の都シュバット・エンリルであることが判明した。詳細な調査記録が公表されることで、青銅器時代のメソポタミア宮殿に新たな資料が加わることとなる。cf. WEISS, H. et. al. 1990

(17) BOTTA et FLANDIN 1849

(18) PREUßER 1955

(19) 例えばエリドゥの宮殿について、小林は「中央広庭の北には南面して大広間がある。遺跡からは何の遺物も出ていないが、ここは『王座の間』とみるべきであろう」と記しているに留まっている(小林上掲書一一八頁)。その他の宮殿遺構についても、玉座などが確認されていないにも関わらず、特定の部屋を玉座の間に同定しており、その真偽には疑問が残る。

(20) LACHEMAN 1974

(21) STARR 1939 pp. 123-179

(22) 本稿でいう「サービス」とは、宮廷における食糧の調達や調理など、王室の私的生活を補佐することをいい、古代西アジア史で一般にいうところのサービスと同義である。

(23) PARROT 1958a

(24) 例えば服部一九八二

(25) 上出二章(1)参照。

(26) KHALESI 1978

(27) 例えばLLOYD 1978 pp. 164-167

(28) MARGUERON 1982

(29) マルグロン論文が扱った資料の特徴として興味深いのは、共伴する文字資料などから宮殿としての役割を果たしていた可能性が高い遺構以外にも、発掘担当者が公共建築物として報告しているものの資料的制約から遺構の性格が未だ確定していないものまで、広く取り上げている点である。これは、古代メソポタミア建築研究が遺構平面に対する考古学的アプローチを軽視してきたことで、公共建築物が持つ考古学資料としての有効性を認識できなかった、という反省が研究の出発点の一つとなっているからである(*ibid.* pp. 1-20)。宮殿遺構として利用されていた建築物における活動の変化を明らかにし、その背景を探ろうとする本稿の目的からすれば、この資料選択法は一貫性を欠いており、援用し難い。しかし、マルグロンの論考は古代メソポタミア建築研究を歴史研究の一

環として捉えた、研究史上重要な存在であることは間違いない。

(30) *ibid.* pp. 531-555. 一部の例外を除きマルグロンは、各室集合を最初に設けられた周壁に囲まれた空間を中心に向かって区切っていくことで室を作り出す「求心型(type centripète)」、個々の室が集まって完成された「構成方式(système composé)」、横並びにされた縦長の室が、開口部が廊下などに向かって開いている「連続方式(système successif)」に分類している。前二者の定義はドイツ学派が提唱してきた「命令形」「接続形」と、連続方式についてはダメルジの言う「平行形室群」(ダメルジ上掲書三〇—三五頁)とほぼ同じ内容を有している。

(31) HEINRICH *loc. cit.*

(32) ハインリヒの分析対象遺構はマルグロンのそれと同様、発掘担当者が公共建築物として報告しているものの資料的制約から遺構の性格が未だ確定していないものまで、幅広く取り上げている。その例が新石器時代における「宮殿の先駆的存在」に関する記述である。彼は第一章でテル・サラサートから出土したウバイド期の「中央広間住宅(Mittelsaalhaus)」を最古の資料として取り扱っている。その理由として挙げられているのは

① 遺構に隣接して貯蔵施設が現れていること

② 「聖なる建物(神殿)」の間に遺構が位置すること

の二項目である。こうした点を指摘した上でハインリヒは、遺構に住んでいた人物が共同体の食糧供給を管理し、都市で行われた儀式においても特別な役割を果たしていただろう、と考えている。こうした議論は古代メソポタミアにおける王権の成立に関連するもので、本稿の目的である青銅器時代宮殿での活動の変容の問題に少なからず影響を与えるものではあるが、こうした先史時代や原文字時代の「宮殿の先駆的存在」が真に為政者の住居であったかについては明証に欠ける。文字資料から宮殿として利用されていたことが分かる遺構の多くが、先述のように古代メソポタミアにおいては青銅器時代に集中していることが、本稿の分析対象を青銅器時代に限定している最大の理由であるが、原文字時代以前に宮殿であったとの明証を持っている遺構が存在しないことも同時に考慮している。cf. *idem.* 1984 pp. 9-13

(33) ドイツ学派の流れを汲む古代メソポタミア建築研究は一九九〇年代に入り、日本の建築史学者が主導的役割を果たしており、コルデヴァイ以来の伝統に属さない、小林以来の独自の研究法を維持、発展させている。その一人岡田保良は一九九三年に発表した博士論文の中で、小林やダメルジが論じたような建築技術・細部技術に関する様式論の必要性を説くなど、ドイツの建築史学者たちとは一線を画す主張を部分的に行っている。

(34) 古代メソポタミアにおける書記の出現時期や役割の通史については、OPPENHEIM 1975 に詳しい。

(35) ウル第三王朝については初代の王ウルナンムや第二代の王シュルギらが土地所有から商業、度量衡に至るまで、徹底的な一元化を図っていたことが既に明らかにされている。また、バビロン第一王朝についても文献史料が豊

富なハンムラビの治世を中心に、灌漑の維持や商業などにおいて王と官僚が強力な指導力を発揮していたことが判明している。クレンゲル一九八〇　三九頁・九二頁参照。

(36) レーリとが古代メソポタミア諸国家を「厳しく中央集権化された構造を有し、前三千年紀に専制君主政が確立してから、その構造が全ての時代を通じて考えられ得る唯一の国家形態として存続した」と呼ぶに留まっていることは、古代メソポタミア史、とりわけ政治史研究において詳細な時期間比較が現段階では極めて困難な状況をよく表している。cf. RÖLLIG 1957-1971 p. 234

(37) 佐藤一九八五

(38) HARRIS 1968. また別の論文では時期間比較を用いていないものの、バビロン第一王朝時代のシッパル文書の中でも特に法律文書を取り上げ、それらが多くの書記によって記されていることも明らかにしている。cf. *idem.* 1975

(39) ヤンコフスカは、王は各 *dimtu* に行政官 *hazannu* を設置しているものの、*dimtu* の代表者の同意なしには労働奉仕や軍役要求といった介入はできなかったとしている。cf. JANKOWSKA 1969a; 1969b

(40) 古代における建築の規模と権力との関係については岡田光正・高橋一九八八参照。

(41) PARROT *loc. cit.*

(42) 上出二章(3)参照。

(43) POSTGATE *loc. cit.* pp. 149-153; 315 (note 232)

(44) *ibid.* pp. 149-153

(45) バビロン第一王朝をはじめとする古バビロニア時代の王朝の公的活動の内容については、クレンゲル上掲書においてかなり細かい説明がなされている。

(46) HARRIS 1968; JANKOWSKA 1969a; 1969b

【参考・引用文献】

ANDRAE, W.

1922 *Die Archaischen Ischtar-Tempel in Assur.* Wissenschaftliche Veröffentlichung der Deutschen Orient-Gesellschaft 52. J.C. Hinrichs, Leipzig.

1933 *Die Partherstaat Assur.* Wissenschaftliche Veröffentlichung der Deutschen Orient-Gesellschaft 57. Otto Zeller, Osnabrück.

1938 *Die Wiedererstandene Assur.* Sendschrift der Deutschen Orient-Gesellschaft 9. J.C. Hinrichs, Leipzig.

BANKS, E.J.

1912 *Bismaya; or the Lost City of Adab: a Story of Adventure, of Exploration, and of Excavation among the Ruins of the Oldest of the Buried Cities of Babylonia.* G.P. Putnam's Sons, New York.

BAQIR, T.

1945 *Iraq Government Excavations at Aqar Quf, Second Interim Report 1943-1944.* Iraq supplement. British School of Archaeology in Iraq, London.

1946 Iraq Government Excavations at Aqar Quf, Third

Interim Report 1944-1945. *Iraq* 8 pp. 73-93

BIROT, M.

1960 *Textes administratifs de la salle 5 du palais.* Archives royales de Mari 9. Imprimerie Nationale, Paris.

BOTTA, P.E. et E. FLANDIN

1849 *Monument de Ninive.* Imprimerie Nationale, Paris.

BOTTÈRO, J.

1956 *Textes Administratifs da la salle 110.* Archives royales de Mari 7. Paul Geuthner, Paris.

BOYER, G.

1957 *Textes juridiques et administratifs.* Archives royales de Mari 8. Paul Geuthner, Paris.

CIVIL, M.

1987 Ur III Bureaucracy: Quantitative Aspects. *Organization of Power: Aspects of Bureaucracy in the Ancient Near East.* pp. 43-53. University of Chicago Press, Chicago.

DALLEY, S.

1984 *Mari and Karana.* Longman House, Essex.

DELOUGAZ, P.

1967 *Private Houses and Graves in the Diyala Region.* Oriental Institute Publications 88. University of Chicago Press, Chicago.

DELOUGAZ, P. and S. LLOYD

1942 *Pre-Sargonid Temples in the Diyala Region.* Oriental Institute Publications 58. University of Chicago Press, Chicago.

DIAKONOFF, I.M.

1972 Socio-Economic Classes in Babylonia and the Babylonian Concept of Social Stratification. *Gesellschaftsklassen im Alten Zweistromland und in den angrenzenden Gebieten: XVIII Rencontre assyriologique internationale, München, 29 Juni bis 3 Juli 1970.* pp. 41-52. Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, München.

EVANS, D.G.

1963 The Incidence of Labour-Service in the Old Babylonian Period. *Journal of the American Oriental Society* 83-1 pp. 20-26

FRANKFORT, H.

1933 *Tell Asmar, Khafaje and Khorsabad. Second Preliminary Report of the Iraq Expedition.* Oriental Institute Communications 16. University of Chicago Press, Chicago.

1948 *Kingship and the Gods: a Study of Ancient Near Eastern Religion as the Integration of Society and Nature.* The University of Chicago Press, Chicago.

FRANKFORT, H., S.LLOYD and Th. JACOBSEN

1940 *The Gimil-sin Temple and the Palace of the Rulers at Tell Asmar.* Oriental Institute Publications 43. University of Chicago Press, Chicago.

FRANKFORT, H., Th. JACOBSEN and C. PREUßER

1932 *Tell Asmar and Khafaje, the First Season's Work in Eshnunna 1930 / 31.* Oriental Institute Communications 13. University of Chicago Press, Chicago.

GELB, I.J.

1972 From Freedom to Slavery. *Gesellschaftsklassen im Alten Zweistromland und in den angrenzenden Gebieten: XVIII Rencontre assyriologique internationale, München, 29 Juni bis 3 Juli 1970.* pp. 81-92. Verlag der Bayerischen Akademie der Wissenschaften, München

GIBSON. M.

1972 *The City and Area of Kish.* Field Research Projects, Milami.

HALL, H.R.

1930 *A season's work at Ur, al-Ubaid, Abu Shahrain (Eridu), and Elsewhere Being an Unofficial Account of the British Museum Archaeological Mission to Babylonia,* 1919. Methuen & co., London.

HARRIS, R.

1968 Some Aspects of the Centralization of Realm under Hammurapi and His Successors. *Journal of the American Oriental Society* 88-4 pp. 727-732

1975 *Ancient Sippar: a Demographic Study of an Old-Babylonian City (1894-1595 B.C.)* . Nederlands Historisch-Archaeologisch Instituut te Istanbul, Leiden.

HEINRICH, E.

1982 *Die Tempel und Heiligtümer im Alten Mesopotamien: Typologie, Morphologie und Geschichte.* Walter de Gruyter, Berlin.

1984 *Die Paläste im Alten Mesopotamien.* Verlag Walter de Gruyter, Berlin.

HUNT, R.C.

1987 Role of Bureaucracy in the Provisioning of Cities: a Framework for Analysis of the Ancient Near East. *Organization of Power: Aspects of Bureaucracy in the Ancient Near East.* pp. 161-192. Studies in Ancient Oriental Civilization 46. University of Chicago Press, Chicago.

JANKOWSKA, N.B.

1969a Extended Family Commune and Civil Self-Government in Arrapha in the Fifteenth- Fourteenth Century B.C. *Ancient Mesopotamia. Socio-Economic History.* pp. 235-252. Nauka, Moscow.

1969b Communal Self-Government and the King of the State of Arrapha. *Journal of the Economic and Social History of the Orient* 12 pp. 235-252

KHALESI, Y.M.

1978 *The Court of the Palms: a Functional Interpretation of the Mari Palace.* Bibliotheca Mesopotamica 8. Undena Publications, Malibu.

KOLDEWEY, R.

1911 *Die Tempel von Babylon und Borsippa.* Wissenschaftliche Veröffentlichung der Deutschen Orient-Gesell-

schaft 15. J.C. Hinrichs, Leipzig.

KOLDEWEY, R. und F. WETZEL

1931 *Die Königsburgen von Babylon.* Wissenschaftliche Veröffentlichung der Deutschen Orient-Gesellschaft 54. J. C. Hinrichs, Leipzig.

KOZYREVA, N. V.

1991 Old Babylonian Period of Mesopotamian History. *Early Antiquity.* pp. 98-123. University of Chicago Press, Chicago.

LACHEMAN, E.

1974 Le Palais et la royauté d'Arrapha. *Le Palais et la Royauté: Archéologie et Civilisation.* pp. 233-282 Paul Geuthner, Paris.

LAMBERT, M.

1955 Récension: Adam Falkenstein, "La cité-temple sumérienne," 1954. *Revue d'Assyriologie* 49 pp. 213-215

LANGDON, S.

1924 *Excavations at Kish 1 1923-1924.* Paul Geuthner, Paris.

1928 Ausgrabungen in Babylonien seit 1918. *Der Alte Orient* 26 pp. 67-75

LAYARD, A.H.

1849 *Nineveh and its Remains: with an account of a Visit to the Chaldoean Christians of Kurdistan, and the Yezidis, or Devil-Worshippers: and an Inquiry into the Manners and Arts of the Ancient Assyrians.* G. P. Putnam, New York.

1853 *Discoveries among the Ruins of Nineveh and Babylon with Travels in Armenia, Kurdistan, and the Desert: being the Result of a Second Expedition Undertaken for the Trustee of the British Museum.* G.P. Putnam, New York.

LEEMANS, W.F.

1950 *The Old Babylonian Merchant: His Business and His Social Position.* Studia et documenta ad iura orientis antiqui pertinentia 3. E.J. Brill, Leiden.

LEICK, G.

1988 *A Dictionary of Ancient Near Eastern Architecture.* Routledge, London.

LEMCHE, N.P.

1995 The History of Ancient Syria and Palestine: an Overview. *Civilizations of the Ancient Near East* pp. 1195-1218. Charles Scribner's Sons, New York.

LENZEN, H.

1955 Mesopotamische Tempelanlagen von der Frühzeit bis zum Zweite Jahrtausend. *Zeitschrift für Assyriologie und Vorderasiatische Archäologie* Neue Folge 15 pp. 21-44

LLOYD, S.

1978 *Archaeology of Mesopotamia.* Thames and Hudson, London.

LLOYD, S., H. W. MÜLLER and R. MARTIN
1974 *Ancient Architecture: Mesopotamia, Egypt, Crete, Greece.* Harry N. Abrams, New York.
MACKAY E. J. H.
1929 *A Sumerian Palace and the "A" Cemetery at Kish, Mesopotamia.* Field Museum of Natural History, Chicago.
MADHLOOM T. A. W.
1960 Les fouilles de Tell Wilaya dans le district de Kut. *Sumer* 16 pp. 67-95
MAEDA, T.
1985 "King as a Law Giver" in the Ur III Dynasty. *Orient* 21 pp. 31-45
MALLOWAN, M. E. L.
1947 Excavations at Brak and Chagar Bazar. *Iraq* 9 pp. 1-261
MARGUERON, J. C.
1982 *Recherches sur les Palais Mésopotamiens de l'Age du Bronze.* Librairie orientaliste Paul Geuthner, Paris.
1986 Quelques Remarques Concernant les Archives Retrouvées dans le Palais de Mari. *Cuneiform Archives and Libraries.* pp. 141-152. Nederlands Historisch-Archaeologisch Institut te Istanbul, Leiden.
1995 Mari: a Portrait in Art of a Mesopotamian City-State. *Civilizations of the Ancient Near East.* pp. 885-899 Charles Scribner's Sons, New York.
MICHALOWSKI, P.
1987 Charisma and Control: on Continuity and Change in the Ancient Near East. *Organization of Power: Aspects of Bureaucracy in the Ancient Near East.* pp. 55-68. Studies in Ancient Oriental Civilization 46. University of Chicago Press, Chicago.
OATES, D.
1966 The Excavation at Tell al-Rimah, 1965. *Iraq* 28 pp. 122-139
1968 The Excavation at Tell al-Rimah, 1967. *Iraq* 30 p. 133
1970 The Excavation at Tell al-Rimah, 1968. *Iraq* 32 pp. 1-26
1979 *Babylon.* Thames and Hudson, London.
OPPENHEIM, A. L.
1975 The Position of the Intellectual in Mesopotamian Society. *Daedalus* 104-2 pp. 37-46
PARROT, A.
1933 Les fouilles de Tello et de Senkereh-Larsa, campagne de 1932-1933 (Rapport préliminaire) . *Revue d'Assyriologie et d'Archéologie Orientale* 30-4 pp. 175-182
1958a *Le Palais 1: Architecture.* Mission Archéologique de Mari (MAM) II, Paul Geuthner, Paris.
1958b *Le Palais 2: Peintures murales.* Mission Archéologique de Mari (MAM) II, Paul Geuthner, Paris.

1959 *Le Palais 3: Documents et Monuments.* Mission Archéologique de Mari (MAM) II, Paul Geuthner, Paris.

PORADA, E., D. P. HANSEN and S. DUNHAM

1992 The Chronology of Mesopotamia, ca. 7000-1600B. C. *Chronologies in Old World Archaeology.* pp. 77-121 The University of Chicago, Chicago.

POSTGATE, J. N.

1992 *Early Mesopotamia: Society and Economy at the Dawn of History.* Routledge, London.

1995 Royal Ideology and State Administration in Sumer and Akkad. *Civilizations of the Ancient Near East.* pp. 395-411 Charles Scribner's Sons, New York.

PREUßER, C.

1955 *Die Paläste in Assur.* Gebrüder Mann, Berlin.

RÖLLIG, W.

1957-1971 Gesellschaft (Mesopotamien). *Reallexikon der Assyriologie und Vorderasiatischen Archäologie* 3 pp. 233-236. Walter de Gruyter, Berlin.

REICHEL, C.

1996 *Political Change and Cultural Continuity in Eshnunna from the Ur III to the Old Babylonian Period.* Dissertation of the Department of Near Eastern Languages and Civilizations. University of Chicago, Chicago.

SAFAR, F.

1950 Eridu. *Sumer* 6-1 pp. 27-39

SAFAR, F., M. A. MUSTAFA and S. LLOYD

1981 *Eridu.* Ministry of Culture and Information, Republic of Iraq, Baghdad.

SILVER, M.

1985 *Economic Structures of the Ancient Near East.* Croom Helm, London.

STARR, R. F. S.

1939 *Nuzi: Report on the Excavations at Yorgan Tepa near Kirkuk, Iraq, Conducted by Harvard University in Conjunction with the American Schools of Oriental Research and the University Museum of Philadelphia 1927-1931.* Harvard University Press, Cambridge.

STEINKELLER, P.

1987 Administrative and Economic Organization of the Ur III State. *Organization of Power: Aspects of Bureaucracy in the Ancient Near East.* pp. 19-41. Studies in Ancient Oriental Civilization 46. University of Chicago Press, Chicago.

VILLARD, P.

1995 Shamusi-Adad and Sons: the Rise and Fall of an Upper Mesopotarian Empire. *Civilizations of the Ancient Near East.* pp. 873-883 Charles Scribner's Sons, New York.

WEISS, H.

1988 The Second Millenium Palace and its Archive. *American Journal of Archaeology* 92 p. 239

WEISS, H., P. AKKERMANS, G. J. STEIN, D. PARAYRE

and R. WHITING
1990　1985 Excavations at Tell Leilan, Syria. *American Journal of Archaeology* 94 pp. 529-581
WOOLEY, C. L.
1923 The Excavations at Ur, 1922-23. *The Antiquaries Journal* 3 p. 317
1926 The Excavations at Ur, 1925-26. *The Antiquaries Journal* 6 pp. 382-383
岡田光正・高橋鷹志
一九八八『建築規模論』新建築学大系一三　彰国社
岡田保良
一九九三『メソポタミアにおける建築空間の特性に関する史的研究』京都大学提出博士論文（工学博士）
熊倉洋介・末永　航・羽生修二・星　和彦・堀内正昭・渡辺道治
一九九五『西洋建築様式史』美術出版社
クレンゲル、H・（江上波夫・五味　亨訳）
一九八〇『古代バビロニアの歴史―ハンムラピ王とその社会―』山川出版社
黒田和彦
一九六九「ハンムラピ時代の国家と社会」『岩波講座世界歴史』一　一二五―一六〇頁　岩波書店
一九七八「バビロン第一王朝の軍事組織」『アジア文化史論叢』二　一―六八　山川出版社
一九八五「古バビロニアにおける社会階級」『古代文明の発展』二六―三四頁　オリエント史講座二　學生社
小林文次
一九五九『建築の誕生』相模書房
五味　亨
一九六八「シュメール都市国家像再構成の試み―Lagas都市国家を中心に―」『史潮』一〇三　一―二四頁
佐藤　進
一九八五「メソポタミアの政治体制」『古代文明の発展』七―二五頁　オリエント史講座二　學生社
ジェイコブセン、Th.（前川和也訳）
一九七三「メソポタミアにおける初期の政治発展」『西洋古代史論集』一　六一―一三六頁　東京大学出版会
ダメルジ、M.S.B.（高世富夫・岡田保良訳）
一九八七『メソポタミア建築序説―門と扉の建築術―』日本教育新聞社
月本昭男
一九九七「最近の前二千年紀メソポタミア研究から」『日本オリエント学会第三九回大会　研究発表要旨集』六―七頁
中原与茂九郎
一九六八「シュメール王権の成立と発展」『西洋史学』七七　一―二〇頁
服部岑生
一九八二「建築計画学とその方法」『建築計画』四五―一五四頁　新建築学大系二三　彰国社
堀内清治
一九六四『古代メソポタミア神殿の成立』東京大学提出

博士論文（工学博士）
前田　徹
一九九二「イシビエッラによるイシン王朝創設」『オリエント』三五―一　一六六―一七五頁
松本　健
一九九七「メソポタミア」『オリエント学会第三九回大会　研究発表要旨集』一〇―一一頁
山本　茂・前川和也
一九六九「シュメールの国家と社会」『岩波講座世界歴史』一　八三―一二三頁　岩波書店